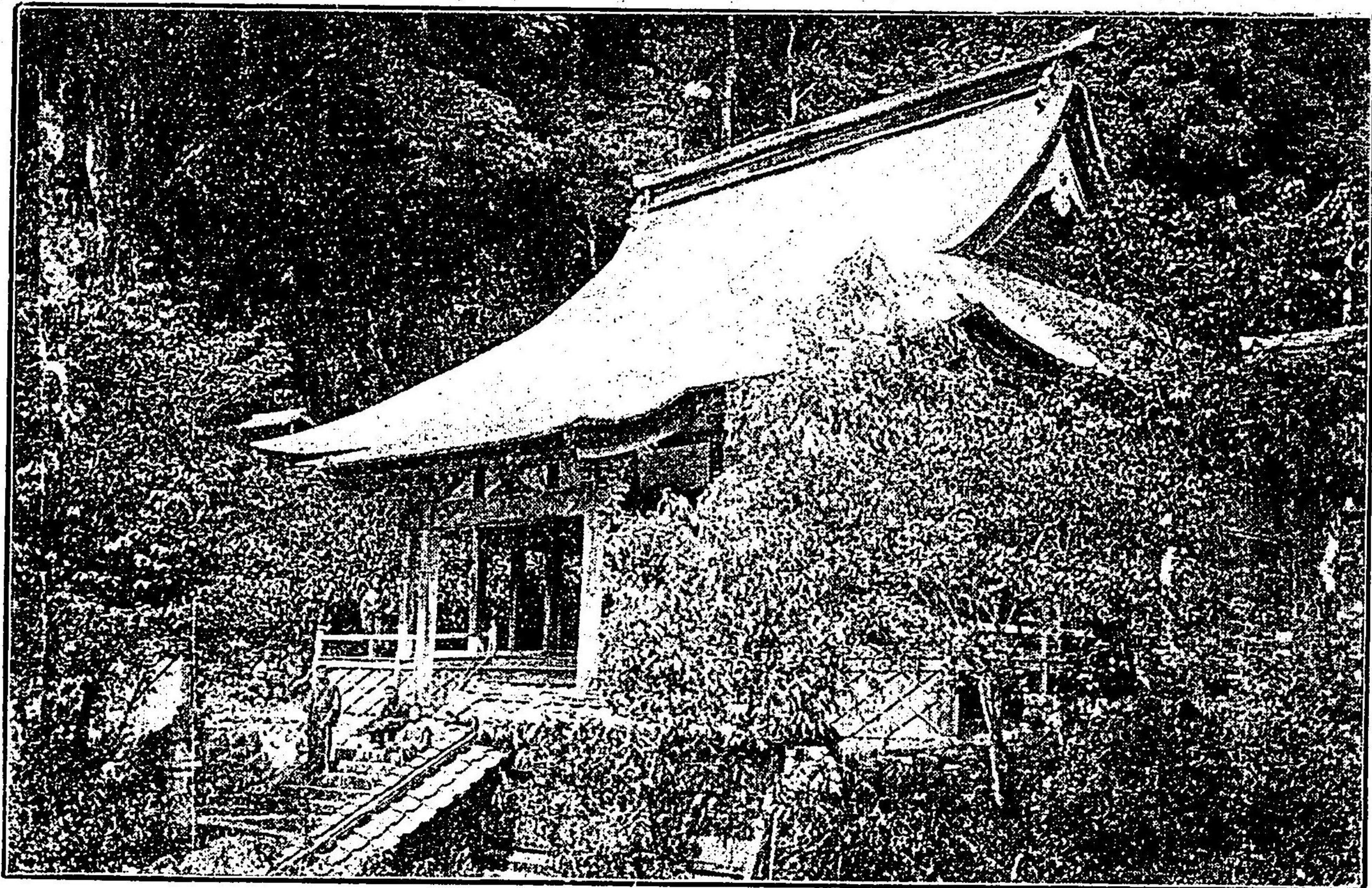


昭 和 路 本 野 吉

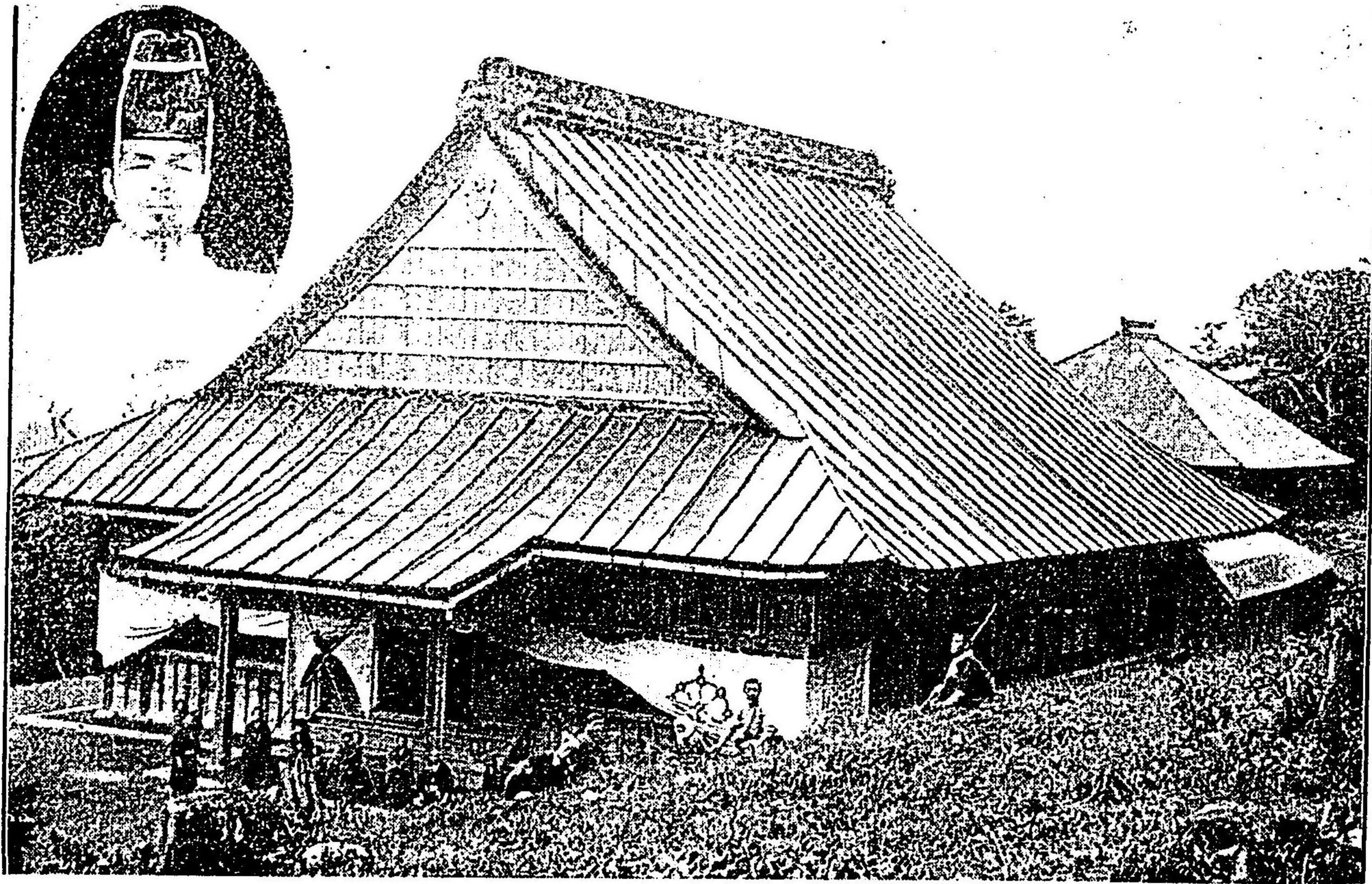
特51

879

I-5R87



(りあ塚首王天白に内境)寺剛金村上川野吉



大壺原山頂大壺教本堂と怪者古川當氏

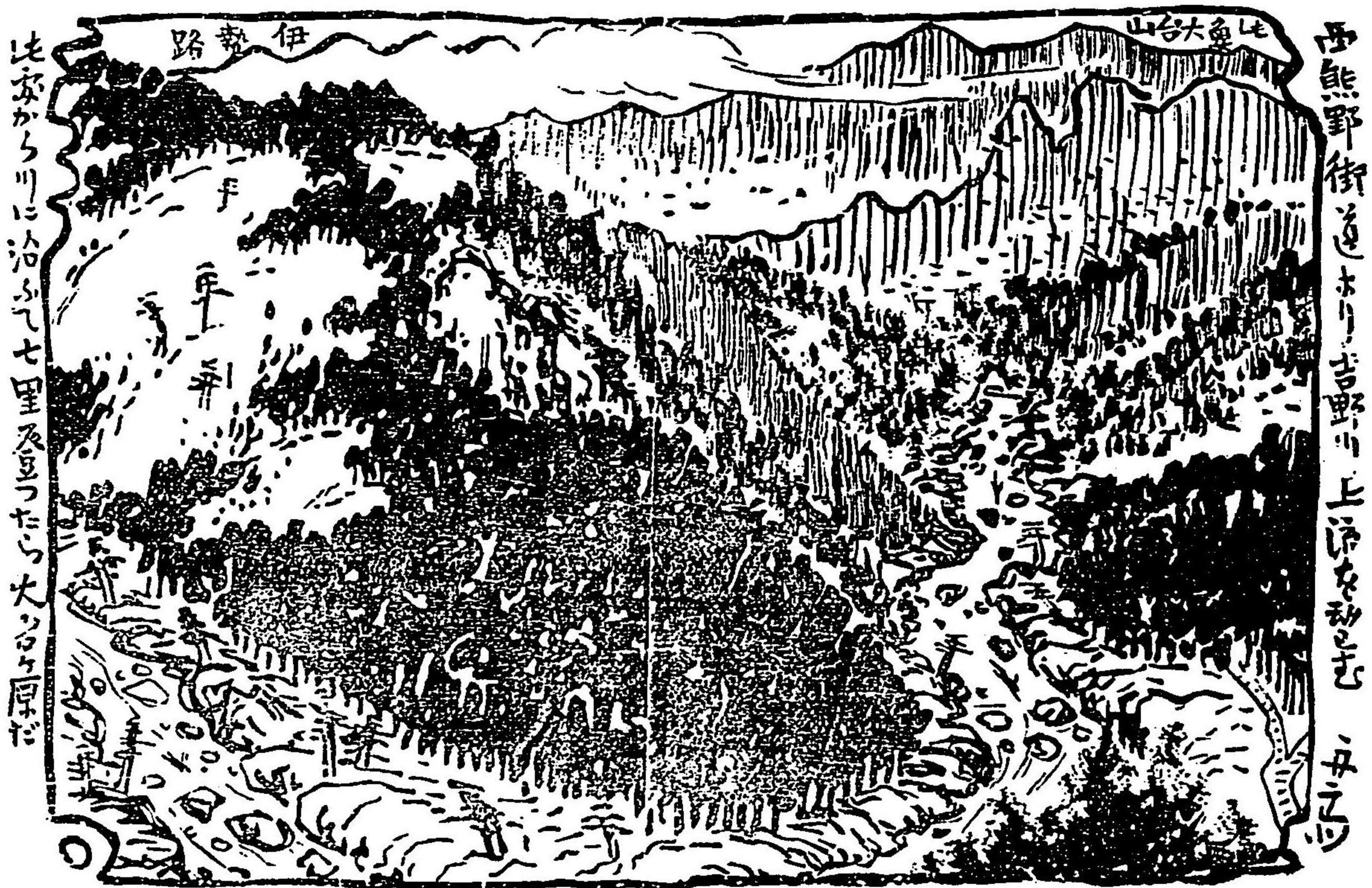
『確乎し
なさい、
こんな處
で重くな
つたら見
殺にせな
くちやな
りません
、貴郎の
病氣で手
間暇取れ
て夜にで
もなつた
ら狼です
せ！』



—牙を剥き鼻を鳴らして—風前の燈火—大々的危険—



危険々々！狼群の襲来！…氷雪に凍れる草庵に静座した行者…溪に餌を求めて吼哮する聲はだん／＼近寄る

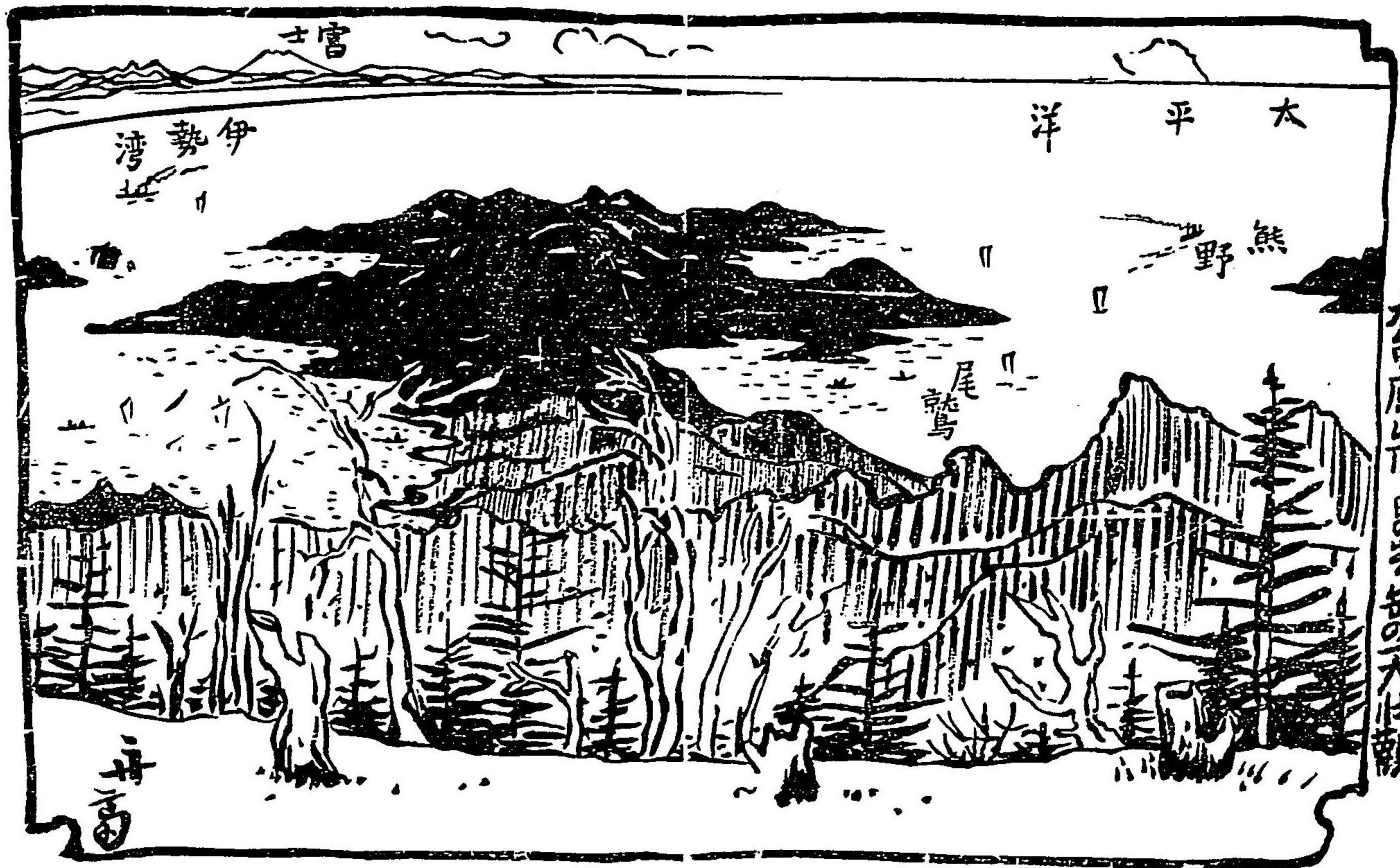


比叡から川に沿って七里及ぼすたら大台ヶ原だ

伊勢路

比叡大台山

西熊野街道より吉野川上流を越すと、大台ヶ原



伊勢湾

大平洋

熊野

尾鷲

富士

大台原山頂易き岳の大仕観

海





吉野川の上の夏

吉野川

小



天
川上村
風景





川上村
柏木山中
の奇巖





川上村の女





大冒險的 深山帶大探險目次

○快旅行の門出……………

五十里の徒歩と一萬三千尺の登嶽……………

大和岡寺の大珍事……………

壺坂山の壺坂寺……………

面白吉野山の一日……………

○畿内の靈山大峯山……………

これからが秘密の大峯山……………

泥辻の泥茶屋……………

戦慄すべき鐘掛の大危険……………

山頂西の覗の大冒險……………

命懸の裏行場の難關……………

明治
43. 5. 30
内交

山上の怪便所……………三四

名さへ恐しい鬼輪谷の天嶮……………三七

脚下に雲舞ふ叔母ヶ覗……………三九

深山中で道を迷ふ……………四一

○三大洞窟探險……………四五

地底の壯觀水晶菊の大洞窟……………四五

地底暗黒界中の大瀑布……………四七

此世で見られん三途の川に無常の橋……………五一

由緒深い金剛寺……………五四

○深山帶大臺ヶ原……………五六

登攀中途僕を案内者が困らせる……………五六

天涯無邊雲上の壯觀……………五九

山頂に一輪の姫百合、天女？女神？妙齡の處女……………六一

○大臺原山の怪翁探險譚……………六三

狂者か？自殺者か？妻子を棄て山に入る……………六三

天狗の怪物か？深夜用便中毛の生てある手が罌丸を撫る……………六七

危険々々！狼群の襲來肉薄……………六九

嚴寒の山中九十餘日間一升二合の米で奈何して命を繋いだか……………七一

獨體の怪物…怪行者の幽靈……………七三

古川行者東京市中を横行す……………七四

教會本堂の建設……………七五

○大臺山頂の名所……………七八

富士が見へる日の出岳の壯觀……………七八

大蛇ヶ岩の大巖壁……………八一

直下八丁十六間大臺山中の大瀑布……………八三

大臺教會に與ふ最後の一言……………八五

○噫々南朝の末路……………八七

皇祖南朝が遺訓……………八七

竹の園生の御皇孫足利の迫害に熊狼栖む深山に落ち給ふ……………九〇

龍泉寺内の兇變！……………九三

忠憤凝つた誠義の血戦……………九八

南朝の正統全く亡ぶ……………一〇〇

四百三十餘年自天王の墳墓落葉に埋る……………一〇四

○深山帯の處女……………一〇七

山中の處女は奈何して居る歟……………一〇七

姫御前のあられもない……………一〇八

吉野山の處女……………一一〇

僕が自殺を止めた處女の末路……………一一二

血族結婚の洞川美人村……………一一三

村財四千萬圓を有する富豪村の處女……………一一五

深山溪谷の娘子軍……………一二七

深山中の女子大學生……………一二九

大臺山頂の勇敢なる一少女……………一二〇

可愛い唇から怖しい話の出る大臺山女の談……………一二一

古武士的の村女と亂暴極まる村女……………一二三

冒險的
大壯舉
深山大探險

高橋舟齊著

▲五十里の徒歩に一萬三千尺の登嶽岳

孤影飄然大和路へ：イヨ！これはく珍しい……

淺薄にして情弱なる現代の時代思潮の反面、近時壯快なる、冒險だの、探險とかの快文字が盛んに出て流行して來たは、吾徒、英氣に滿つ神州健兒の快とすることで、此種の氣連に依つて或はウゴくとして居る社會の情弱輩の志氣を多少鼓吹することであろう。けれども其冒險とか、探險とかの文字には、噓語が多い偽が多い、捏造が多い、空想が多い、無暴が多い、臆想が多い、まだ見ぬ世界の奇地に猛獸をかつて、夫れに人物をあしらつたり、或は山靈、怪物、變化等を筆の先で製造した架空の説を事實らしく讀ませて人をチャームせんとするのだ、斯



大探險出發當時に於ける著者の肖像

くは、此種の文字が終には落語的に過眼視去られやしなやかとこれを憂ふる僕は、それ等机の上で筆先に依つて作られた偽の文字が癩で堪まらず、一つ破天荒の大壯舉を行つて、ウジ／＼する世の俗輩共を驚かし呉れんと、金をも鎔かす八月十五日午前十一時何分かの桃谷發の瀛車で冒險的探險旅行に孤影飄然と大和路を差して勢よくも出發した、

瀛車は早や王寺に着いた、其處で再び櫻井行に乘換へた、瀛車は葛城の山麓を廻つて、下田、高田を打ち過ぎ、程なく畝傍驛に着いた、其處で下車した僕は、さあこれから歩行で七里の吉野へ登り、それから猶も六里の大峯から五里の柏木に降つてまだ以上七里の奥に聳ゆる大臺原山に攀登探險するのだ、往復五十里の山中單獨の大旅行、それが大峯の六千四百尺を登つて降つて又六千餘尺の大臺山に登るのじや、合計殆んど一萬三千尺、富士よりも高く登るのじや、前途は遠慮だ、けれども其間の愉快が想像されて壯快の氣満ちて足が軽く思われるも無理はない。

長途の探險旅行、先づ何はともあれ道中無事なる事を此處迄來たついで、神武の御陵を拜して檀原神社に御祈禱を捧げねばならぬと驛前を西へ神武街道に向つてヨチ／＼と頭の上が瀛車路になつてある下を潜つて行くとタラ／＼登り、一方土堤で樅木の雜木が並立つてある、それは飛鳥川の堤で其處に架られてある橋の名が振つて居る、何に起縁して付けたかソノボ一の橋、其傍に白ペンキ塗の大立札、其頭に手が付いて居つて、夫れが御陵の方を指示してゐる、其立札には官幣大社檀原神社と大書して其下段に、宮司西内成郷と麗々しく記されてあるは結構でござると神念の感を深からしめるか、夫れは知れないが、初めて見た僕はこれわ／＼と其突飛に度膽を抜かれた

其珍橋を渡つて今井町に這入り特別道路の神武街道を御陵に向つて行かんとする僕の名を後から呼ぶ人、誰だらうと見れば兼て知り合ひの當地の通信を大朝に送つてござる大阪朝日新聞今井通信記者坂部米次郎君と云つて此の四隣での名物男、何が名物かは知らぬ淡白な書生肌の面白い先生。

「イヨーこれはく珍らしい」
と互に途上の挨拶済した後、僕の囁々しき旅装を見た坂部君は

「大そう武装して何處へ」

「大峯越て大臺ヶ原探險に、歸路には土産に狼の糞と天狗の鼻柱とを……」

「これは壯舉だ、先づ御祝申そう」と其附近の料亭に僕を擁して祝盃を擧げて呉れた、夫れを有難く頂戴した後再會を約して其坂部君に別れて御陵を拜し、又榎原神社にも参拜した、其神社境内や路中の立石、立札、此處へ小便す可からずの小札に迄宮司西内成郷と記されてあるは森下仁丹に劣らぬやり方、有繫に日本の珍物として又日本三福顔として天下に紹介せられた、從五位、西内成郷宮司様だ畏れ入つた御方だ、其西内宮司の詠歌に

榎原の宮の春風吹き立て

なびかざ良女や四方の民草

其歌の深意は僕等民草輩には餘りに解されないが、兎に角畏れ多くも、我國皇祖

が天祖建國の神詔を繼承し天壤無窮の皇基を開き皇統萬世に垂れ、始めて四方に君臨し給ひたる御宮址が発見建言者たり又其靈址の守護者として偉大の尊敬を拂はねばならぬ尊と宮司が詠歌として謹んで拜誦すべきだ、結構な事だ、

▲大和岡寺の大珍事

…鮮血凍々―死屍累々の大悲惨…番僧の足をグツサと一刺

…虎のやうな泣聲…團子蜂の襲來

榎原神社より東して飛鳥村に這入つて壊けかけた飛鳥大佛堂の前を通つて西國三十三所第七番の靈所岡寺へ詣でた、時、日は西に落ちて夕靄は前面中和の國中平野を閉して藍鼠に打ち霞む金剛、葛城の山巔の上空には一ツ二ツの星が輝やいてゐる、それに對する岡寺境内は寂として本堂背後に繁れる杉林は黒く凄く其中を白衣の巡禮がトボくと里の宿に忙く姿の影薄く、やがて山門の方に消へ行つた、

僕は其客殿玄關に行つて取次の小僧に舊知の住職に來意を傳へた、

『これは珍らしい客人じや』

と云つて早速に客殿坐敷に通して手厚い待遇、丁度其處に來合して居つた下の岡と云へる里の酒造家松村と云へる富豪の子息が居つて色々と坐談に花を咲かせた、其松村君號を飛南溪と付けた新派の俳人で大に話せる御人だ、それで其夜は僕が俳畫を書けば松村君がそれに句を書くと云ふ趣味深い遊びに夜を深かした其時の飛南溪君の作に

廓に妓の泣くかに灯影去りぬ雁や

邂逅に昔を語る夜の花や

中々大新派、振つて居る、やがて飛南溪君は辭し去つたので僕は寢に就いた、

明る日旅枕寢覺早やく起き出て露深かき岡寺境内を見んとて廊下を傳つて本堂に出で、金剛嵐の朝の清風を味ひつゝ、ほのぼのと明け行く景色を眺めて居る時、下方石段を昇つて來たる一團の山樵夫、其中の一人が本堂の屋根裏にある團子蜂の大巢を見付けて同行のいづれにも知らした、

『團子蜂の巢、それはよい物、見付けた、皆して取つて辨當の菜に山で焼いて食やう』

と彼等の中で相談出來て早や其仕度、巢にある蜂の子を付け焼きにして食せば旨いと聞いて居つたが眞實本當に食する人も無いと思つて居つた、僕は事實夫れが爲めに取らんとする彼等を見て其偽りでない事が分つた、

彼等が見付けた其蜂の巢は摺鉢位の大巢で其巢に重り合つて居る蜂群は殆んど數へ切れない程の多數、其蜂群が今や其巢を破壊されて山樵夫に奪ひ取られるのだ、と思へば可愛想だが最し其儘棄て置けば或は參詣者を刺したりしてはとて僕は山樵夫の暴舉を咎めずに見て居つた、すると本堂の下より取り出した長さ竿を二本繋いでから、それを持つて其巢を突いた、不意の襲撃に驚いた蜂群はバツト四方に飛騨き立つた、其して又其巢に集つて防禦を嚴にしたが堪らない、再度の突激にガラリと破れて其大巢は本堂と客殿との間の廊下にバツタリ落つた、白い蜂の子は爲めに潰れて廊下充滿に鮮血凛々、死屍累々と堆積して慘悲を極めた、

其四方に群集する蜂群は其死骸に絶り或は飛違ひして上を下にこの一大騒動、大珍事其大變事知らぬ寺の番僧の榮照と云へるが、本堂にお供物をせむとて客殿の方より其廊下を傳つてやつて来て其蜂の潰れた巢を神ならぬ小僧はグンニヤと踏んだ、『おや』と驚いた

其時既に最う手負に憤怒せる蜂はグツサと榮照の足を刺いた、不意の事に榮照は『アッ』と悲鳴をあげた、其聲に飛違ふ蜂群は、さては此奴が敵かと思つたのであろう、顔と云はず頭と云はず當る處を刺したをした、可愛想なのは其時の榮照で、其痛手に堪らず大聲で虎のやうな泣音を立て、客殿に逃げ入つた、これを眺めた暴漢たる山樵夫は、これは大變だとして山中深く逃げ去つた、僕も長居して榮照のやうに刺れてはとて境内を廻つて客殿に歸つた、其時榮照は頭や顔に赤い無数の瘡をこしらへて痛さに泣いて居る、住職は此の珍事の顛末を僕から聞いて無暴の山樵夫に對し大に怒つて居る、夫れ等珍事の爲め出立の時間が後れて、其晝頃寺を辭した、

▲壺坂山の壺坂寺

…坊さん頭は圓いが心は……やれ〜勿體ない……罰が當る…盜首と俳味…

岡寺を立ち出た僕は岡の町に出で樂屋と云ふ宿屋の横を東して聖徳太子の出産地たる橘寺を見てから土佐の街道に出て壺坂山に登つた、壺坂山の壺坂寺、昔し澤市、お里の淨瑠璃の悲劇で名高くなつてある、山間の一帯の杉林、古色蒼然たる山門や寶塔や本堂、其山門に「らい病の妙薬」と記した廣告紙が貼てあるのが悪ふ〜殊更目に付いてなんだか厭な氣がする、境内に這入つて本堂で元價七錢程の繪はがきを十五錢で買はされ、それに紀念のスタンプを求めて、ふと境内左手を見たら、表面を銜ふ俗悪な旅館の座敷のやうな新しい建築に總て新しい家具の中に垢染んだ白衣を付けた小僧と美しい院主の常盤とか云ふ坊さんが頻りに大工に指圖して御座る、常盤の院主さん御坊さんだ、頭が圓い、心は奈何であらう？、それは知らぬが日本の宗教家だ、御念佛や大盤若は知つて御座るであらう、

けれども吾等俗人は漢字許りで而かもよりムツカシク綴られた其經文の主意が解せぬ、それは有難いのであらう、有難そうに云ふから、けれども僕は此處で一言の經文も聞かぬ、只二挺五厘位の蠟燭を一錢に賣付ける番僧の聲と茶所庫裏や本堂の修繕の寄附の依頼の聲と内殿入りして色々説明のやうな、有難そうな詞、それを聞かれて、内殿を見ると内殿入り料とか云つて金を絞られる、中でも蠟燭を買される要するに宗教本來の性質と云ふものは何にもない、宗教を假面に着て、それをより以上表示するべく頭を圓めた人が、參詣の善男女の懷中を絞つて自己の慾望にする所謂詐偽的手段それ許りだ。今し多信者の寄附に依つて新築出來た美しい客殿や茶所や庫裏にいづれもの參詣者を迎へ入れるか。這入つたら又何んかの名目で絞るのではあるまいか、要するに宗教家と云ふよりも頭を圓め法衣を着たお寺の番人とても云ふべきか、又山中に立籠つた恐ろしい何んとても云はねばならぬ、嗚呼斯くして我宗教は葬られ只昔の面かけを彼等拙劣なる番人否觀音や寺を種の興業野師に料金を拂つて拜まして戴くやうなものだ、斯ふなると

いよいよ心細い事ぢや、何れもの大和の社寺を巡拜する人は眉毛に唾を付けて行かねばなりませんと一言云つて置く、けれども此種寺院は斯くして寺院の維持をせなければ外から這入つて來る道がない、總てがかゝる主義で寺を飾りて人を引き付け大に金を吸収して夫れに依つて衣食して土地を賑しつゝあるのだ、であるから其住職の如何に依つて寺院は勿論土地の發展にも大關係がある、夫れ等を思へば宗教を標榜して頭を圓めた此種の坊さんは宗教家として敬意を拂ふよりは土地繁榮策の一道具者として尊敬をなさねばならぬ次第とは觀音様の御本意か？そんな理窟の探索は今世の中、野暮氣だ、何はともあれ坊さん確乎りやつて其地を賑はしてほしい、澤山憎れ口を叩きました、やれ／＼勿體ない、罰が當る、南無阿彌陀佛、と僕は妙なお念佛を誦へてから本堂で一服やつて居る、其處へ僕と同年輩位い一人の旅者ござつた、

「何處へ………」

と僕が問ふたら

「吉野へ見物に……」

「それでは幸ひ僕も吉野へ行くから道連れに」

とてやがて旅は道連れとか云つて其旅者と同行して行くのだ、其旅人は慶應の大学生で飛南溪君のやうに俳句の好きな人じや、號は其時聞いて忘れたが何んでも俳雜誌ほとゝぎす誌上に屢々其句作を發表しなせる青年俳人だ、奥の院の五百羅漢の石刻を見てこれは珍んだ俳味がある、縊首に恰好な松の枝振を見ても俳味がある、茶店を見ても、荷車を見ても、柴山を見ても、馬の糞を見ても俳味くんと無上に喜こんで道々頻りと句作をやりつゝ、ヨチくんとお歩きだ、中々に面白い、途中安産の瀧と云ふ處で休憩した、其安産の瀧、中々に幽翠で流れに架つてある安産の橋がこれ又中々に雅味を帯びて俳味更に深い、其溪の岩に連ふた冷たい流に疲勞した足を漬つゝ、僕は畫、俳人は句と二人スケッチしてから、今し暮れかゝる夕空を急いで六田に出で、其渡しを渡つてよちくと吉野山に登つて行くのだ。

▲面白吉野山の日

…縣會議員とさこやの大将…靜の悲しき訣別…青嗅い吉野

テル…吉野山の珍物呑助…山頂で呑んで呻て大平樂…

夕焼けに燃え立つたやうな空はだんくと薄れて上より藍鼠色が掩ふて行く、川上の奥より流れ來たれる吉野川は、眼下に白く長く上市の町を遶つて、遠く五條の方に流れ、川面は夕榮の彩雲が夫れに反射して美しい、指呼の連山は霞み棚引いて一步登るに従つて其眼界が廣くなるが夫れと同時に夕べ暮れ行く夜の幕が段々に濃くなつて御野立の趾迄來た時は既に全く日は暮れて暗瞻たる夜の山道であつた、其中を二人連れ立ち辿つて漸やくにして八時頃吉野山金の鳥居前の芳館館さこや、と云へるゑらゑらい廣い宿屋へ着いた、此宿の館主は大村裕と云ふ人で中々に能辯家、それが普通宿屋の付けたやうな心持ちの悪いお世辭とは違つて堂々たる議論だ、其宿論が面白い、大峯山を日本の公園としての事業を起して大に世人を登山せしめ其六千尺頂の絶大の自然美を看取せしめるやうにしたいいな事

を云つてなさる、夫れが氣焔でなく果して事實として近年に其地方長官を會長にして此の大事業を起さんとの計畫らしい、中々に宿屋の亭主としては惜しい人だ其裕君は僕等を迎へて早速に奥の新座敷に通して山上参りの混雑せない内にお湯をどの厚意、嬉しく、

やがて湯浴して座敷へ歸れば、裕君早や膳部を配いてピーヤの口を抜いて待つて居る、早速に盃は換された、内に話が出る、氣焔が始まる、其連續して出る裕君の論調には有紫に僕は面食つた、連れの俳人もこれわくと斗りで俳味だとも云へぬらしい、此裕君其胸に滿つ熱烈の意氣に客年其地縣會議員の候補者として武者振り勇ましく堂々正義を標榜して打つて出で有所る惡戰苦闘した其時は奈良縣有史以來破天荒の大競争であつて吉野郡を騒がした時で、終り君は不幸、名譽の失敗に終つたは惜しいが其意氣の盛なる壯氣は實に敬服の至りだ、

此のさこやの裏庭に源義經が愛妾、靜が夫義經を慕つて白雪に掩れたる吉野山に登り、戀しき其夫に逢ひて後悲しき訣別をして

みよしの、峯の白雪ふみ分けて

入にし人の跡を戀しき

この歌を詠じて捕われた藤尾坂の舊跡があつて中々に旅館として趣味が深い、かくて、互に盃を交しつゝ三人思ひ々の氣焔、それが更け行く夜と共に晝の疲勞と廻る酔にしたがつて氣焔もダレて來た、睡くなつて來た、

『大分更けました、嘸お疲勞れでしやう、床を取りまじやう』

と裕君、氣を利かして下女に床を取して辭し去つた、早速に夜具の中にモグリ込んだ、がそれ迄は酔と疲勞と睡氣にグンニヤリして居つたが旅枕二人は睡られない、明日の旅程を奈何したらよいかと、連れの俳人大學生君はこれから高野へ行くのだと云つて居る、高野へ、吉野から行くとしたら洞川に降つてから天の川、天嶮を踏んで行かねばならぬ、であつたら大峯へ登つてから行く方がよい、其して都合で大臺へ登りましやうと僕が進める、大臺迄は時日が許しませんが大峯迄お共しても大事はありません、それでは明日吉野を見物して緩歩りと登らんと話

し合ふ内に二人はうとくと睡り付いた。明る朝、飯を濟まして繪はがきの幾枚か書いて知己に送つてから宿を立ち出で延元陵を拜し、如輪意寺に詣で正行の遺蹟を偲びて院主井上徳定師に薄茶の一杯じやない、三杯も頂戴して、楠氏の紋の付いた菓子や玉座は幾度も拜観したから止して、より辨慶の力石にこれわくと驚き御寶物や玉座は幾度も拜観したから止して、よちくと奥に登つて行く、途中吉野ホテル否これは失敬ホテルで増田の主人と健坊と云ふ若旦那とに逢つて、例の商賣柄のお世辭に少なからぬ面食わされた、春の芳雲館吉野ホテルと來たら中々に設備も届いてあるであらう、まだ實地に見た事はないが、此頃の吉野一等旅館吉野ホテルと來たら實際青嗅くつてホテ持がならない、それでかは知らぬが、春はホテルで夏はホテルと土地の悪太郎の評、或は適評かも知れぬ、けれども夏季の吉野は其客の大部分が大峯行者の精進連であるで、ママサカ觀光に來たる客に對して魚肉の用意も出來ない、川越へ山越へた不便な山だから致方がない、芳雲館に限らず、此山の一等館總てが其通りである

が、ホテルと自稱した其ハイカつた標榜に對して評するのみだて健坊氣にせぬやう、其健坊や主人に又歸りにと辭を殘してホテルを過ぎて七八丁行くと吉野山中での嶮しい吃驚坂、それをヨチくと登つて枯死した雲井櫻を見て有爲轉變の感に打たれつ、水分神社に行つて豊公全盛時の遺物たる現今特別保護建造物たる此神社の樓門や社殿を見てから其神官山本櫻陰と云つてさこやの主人大村君の實兄なる人を訪ふた、此の櫻陰君は吉野の珍物として知られた中々の珍人、酒はやう飲む、夫れが毎日朝から晩迄酒浸りで吉野の呑酒君と迄呼れて居る大猛烈の呑助だ、其呑酒君、來訪の僕等の顔を見るなり、

『さあ酒だ』

とのまだ座に付かぬに早や急激、いやはや兼て期して居つたが面喰わざるを得ない、連れの俳人君もこれはと驚く、

さて呑酒君醉が廻ると新調口調で怪氣焰を吐く、

世の中を厭ふとなしにおのづから

櫻陰にぞわれは住みけり

こんな歌を呻つて大々平樂、た山の大将は我輩でござると恣々と山氣に親みて居る呑酒又偉いと云ふか？、變珍極まる人じや、やがて其處を辭してホテルに歸つて其明る日呑酒君の厚意で宮の男を案内に付けて呉れた其案内者を連れて午前二時、暗憺たる夜を突いて大峯に登山したのだ、

▲これからが秘密の大峯山

…法螺や鈴やのうまくさんまいだ…頗る恐しい神主が破れ

鐘のやうなドラ聲…奇怪なる嚴命…巨蛇が火焰を吐いて邪

魔する…

畿内の靈山大峯山、大和吉野山より南六里に聳ゆる海拔六千二百尺、其大峯山は白鳳二年役の小角が山籠の靈場として世人の信仰を繋ぎ、其以來今に至る何百年來の風俗習慣を少しも改めずやつてゐる山上には一大危險と一種不可思議なる

靈場が籠められて夫れが爲め登山する信者は毎年數万人の夥多にて、年々五月八日に扉開登山を許し、九月三十日扉閉するのだ、其奇怪の靈山中の危険なことや怖しいことや、不可思議なる事や其他總ての事は皆山上の秘密として參詣者は口外せぬ、僕は其山に例の俳人と山案内者と共に登つて有所る探險した、秘密に閉された奇怪なる大峯山は何處な山歟、いで其秘密を破つて此處に發表するのだ、

信者の登山者は兜巾、鈴掛、金剛杖、總て山伏姿で多いのは數百人、少ないのは十數人團隊となつて、其先達と云つて山上に精通した者が引率して登攀するのだ其初めての參詣者は彼等の仲間『新客』と云つて新兵のそのやうで、どんな事でも先達や先輩の命令に従はねばならぬ、

其れ等登山行者は先づ第一にさこやの前の金の鳥居で行をする、行と云ふは其鳥居に手を掛けて其ぐるりを廻りつゝ馬鹿らしい歌を先達の命令で唱わさゝれる、

よしのなる、金の鳥居に手を掛けて、

みだの淨土へ入るぞ嬉しき、
 おんあべらうんけんをば……と三度念唱さゝれる、其して宿に着くのだ、
 いよいよ登山出立は午前の二時が一番山で、それから二番三番と夜の明けない内
 に法螺や鈴や、のうまぐさんまいだ、とのかけ聲で後鉢巻、玉襷で金剛杖を突鳴
 らして勇ましく登山するのだ、芳雲館に宿り合した其の一番山の一行の中に僕等
 は加つてエンヤ〜と昨日登つた吃驚坂を再度登つて水分神社に行つた、其處で
 其神主様、所謂呑酒君に新客は清の祈禱を一人前二錢でやつてもらうのだ、晝見
 れば變珍な呑酒君も其時は白衣で無造作な頤髭も怖しうだ、それが夜中で四方
 は大杉林、明りと云つたら參詣者一組に對する一つの提灯と神前の燈火のみで實
 に凄い、宮本武藏が狒々退治の光景のやうで氣の小さい新客は天狗に人身供養に
 せられたやうな心持ちになつて恐怖の念を起さず、夫れ等新客を拜殿下を集めて
 さて神主は大きな御幣を振りつゝ破れ鐘のやうな聲で
 『これ、お新客衆！やう聞いて登りなされ、これからが大峯の部にかゝるんだ！』

そも〜當お山は一日の中に七遍づ、相が變ると云ふ荒山であるから、怖しい一
 方、面白いことは少しも無い、其怖しい不思議な處を信仰一心で登るのであるか
 ら、一念になつて登らねばならぬぞ、心に諸々の罪あらば此處に於いてよく懺悔
 せよ、善心に爲つて先達の云ふ言を聞け、ゆめ先達に背いてはならぬぞ、背いた
 ら立處に山荒れ神罰當るぞ！、であるから小便するにも先達の命でなければなら
 ぬ、其上お山の事は宅へ歸つて口外してはならぬぞ、屹度申付るぞへ！』
 と奇怪なる嚴達を申聞されて其社を立出で、なんまいだ〜と暗黒凄然たる山道
 を登るのだ、
 登る事十五丁程で金峯神社其處にも子守と同じやうな事を云ひ聞す處である、其
 社殿の横に若し義經が隠れて居つて、それを吉野の衆徒に見付られた時塔扉を
 蹴破つて逃げたと云ふて蹴抜の塔と云ふのがあつた、其中にも役の行者が住んで
 行をやつたと云ふので大峯登山者は暗黒の塔内に這入つて

よしのなる御山の奥のかくれ塔

本來空の住家なりけり

このヘンテコ極まる歌を唱へさゝれた行場の一ッだつたが惜しい事に二三年前火災に罹つて亡くなつた、今やこれが再建中だ、

金峯山を過ると段々山の相が變つて来る、道は険しくなつて其中を二十五丁ほど登ると、心見の茶屋と云つて實に穢ない茶店がある、其處に役の行者が腰掛けて何の心を見たか知れないが、心見の岩と云ふのが有る、それから今は新道が出来て道も樂に又通らないやうになつて有るが舊道三十町程登ると、足づり茶屋と呼ぶのが有る、今は新道の方へ宿換して居る、其處又振つた面白い處だ、

白鳳年間、役の行者の母ちや人が、可愛い悴を尋ねてヨチ／＼と登つて此處迄来たが、女人禁制で此處から奥へは行けない、それを子を思ふ親心、無理に強いて行こうとしたら、數丈もあろうと云ふ巨蛇が火焰を吐いて邪魔する、母ちや人は爲めに足づりして悔んだと云ふ舊跡で其時の足形が付いて有る岩がある、何んやら煙りにしたやうな傳説、馬鹿らしいが、それを皆眞に受けて有難そうに新客は

感心して聞いていた、

それから二十五丁程の雜木林の間を昇ると百丁目の茶屋がある、今はこれ又新道に宿換へした、其茶屋で夜が明ける、朝飯を食ふ、一服する、其して疲勞を休めて銳氣を養ふ山中の慰安所だ。

▲泥辻の泥茶屋▲

：頭から油汗がタラリ／＼：下見たら千仞の谷：奈何じや、
陀羅尼助を買んか：一種異様の奇怪の八種：

油揚に刻み昆布の辛煮の至つて不味い無風流極まる菜と大盛飯に飢た腹を満してから百丁目茶屋を立出た、時夜は全く明けて指呼の連峯は眞碧に鮮明で其山麓を立ち登る白雲に包まして有る壯美の風光は得も云われない、それがまだ以上昇る僕等は更により以上眼界が廣く雄大になるの絶景を思へばをのづから心氣が雄躍する。其時朝の密雲は爲めに昇る太陽を隠して居つたは甚だ遺憾であつた、それ等の大景を眺めつゝ行くと雜木の密林が繁茂して有る山腹に出る、其處を蛇腹と

云つて道は細くて一方深溪ではあるが平坦だ、其中には瀧もある、溪流もある、其して大峯名物の大山蓮や、山紫陽花、袋桔梗、不楠其他の高山植物の夥多が繁つて、羽扇楓の大樹には行者髭と云ふ細長いこけがからまつてある、日光は蜜林に遮られて薄暗い、爲め度が底冷で眼下溪間の枝を鳴して吹き上る風は冷かた、それが長途の間で終には厭氣になる、其頃には道は登りとなつて赤土地が岩道となつて峻しくなつてくる、其峻しさも一歩一歩で更に峻しくなつて登る僕等の頭から油汗がマラリ、

其處が鞍掛の岩と云ふ處でこれからが難道だ、鞍掛岩とは其峻しい岩道で其岩には人の攀ぢられるほどの足痕が刻まれてゐる、其間が半丁程で無くなる、這度は丸木で楷梯がしつらへてある、それを攀る時の心持は皆戰々兢々として匍匐になつて攀る、

下見たら千仞の溪、一步過つたら身は粉葉微塵だ、

『如何でござる、俳趣味は……』

と僕は連れの俳人に問ふたら先生玉なす熱汗を流しつゝ苦笑するのみだ、斯くして漸やく其處を過ると飢坂と云つて、役小角が飢へたと云ふ矢張り岩道、其處を過ぎて二丁程行くと泥辻と云つて山中第一の大茶店がある、其茶店が洞川と吉野と山上との振り分け道になつてゐる、

其茶店は道一杯に建た莖張りの長さ殆んど六十間程もあろう、中には洞川から來て居る宿引きや山案内者やらで大きな釜に茶を沸して行者餅と云ふものを賣つてゐる、茶店の真中が道路であるから山男や宿引は五月蠅さく付纏ふて來る、夫れを体よく云ひ逃げて半町程行くと陀羅尼助の店がある、店と云つても板圍みの家と云ふよりは大きな箱で、其處で、

『奈何じや行者の神藥、陀羅尼助を買んか……』

と進める、夫れ等洞川人は何んとなう一種異様の人種のやうで陀羅尼助のやうに苦り切つた奇怪の感を引き起さしめる、

▲戰慄すべき鐘掛の大危険

：水一滴が大枚二錢：雲を衝いての怖ろしい大絶壁：一縷の頼みとして命を托した鎖は途中で無くなる：岩を掴んで泣き出す：

其奇變な店を過ぎて半町程行くと矢張り岩坂道で其道中一丁程の間は古草鞋の山なしてゐる、夫れは此處迄來つた登山者がこれからの難所で有るので古草鞋を新草鞋と換へて登らねば危険だと云ふのであるからだ、そしてこれからが難所であるから登山者の身體を清めねばならぬと云つて洞川より來て居る夥多の男が、竹筒に這入つた怪げな水を木の葉に付けて一般の登山者に振り掛けて一人に付いて二錢づゝ強請的に出さしめる

此處からの山は大變化して、瘦た木と岩斗りで、白雲は下から舞上つて來る、氣候は冷たいと云ふよりは寒い、其寒冷に身をすくめつゝ、第一にかゝる難所は、油溢と云ふ坂で嶮道の岩を傳ふて流れてある水は泥水で油のやうだ、それに丸木の雁木が作つてある、それも泥水でズル／＼と滑る、それを渡らねばならぬ、其

間一丁もある、一生懸命だ、それを無事に攀ると今度は小鐘掛、其次が大峯山頂表行場の最大難所たる鐘掛と稱へる屹巖町餘の絶壁！

雲を衝いて立てる様は見ただりでも怖ろしい、其下へ新客を連れ來た先達はこれから其難所を洞川より來たれる行場案内者に任して攀さすの一大危険を、無事なれと一心不乱に祈る、新客古客總ては行場案内者に付いて、眞經を誦へて登るものもあれば、のうまくさんまいだを唱へる者もある、其始めは岩に刻まれた穴を傳ふて行く、登るに従つて其穴が無くなる、今度は岩の上より鎖りが下つてある、それを命の親とも思つて絶り付いて攀る、下見れば白雲舞ふて冷たい強風が吹き付ける六千四百尺山嶺の巖頭、冒險危険、怖ろしと云ふか、此時に於ける攀登者は生た心持じやない、其危険に對して一縷の頼みとして大事の命迄托した鎖は其中途で無くなる、爲めに上る事も下る事も出來ない、岩を掴んで大方の人は泣き出す、すると上から案内者が玉嚮をグツと掴んで嶺の安全の所へ昇らして呉れる、其時には蘇生の思ひにはツツと呼吸突いて攀ち

来た下を望めば一大恐怖に思はず戦慄する、其處で先達は又歌を大聲に讀ます、かねかけとふて尋ねて来て見れば

九穴の藏王下にこそ見る、

其して其處に祠られてある役の行者の石像に賽錢を上げさゝれる、思ふて見れば奇怪な山だ、

▲山頂西の覗の大冒險

…怖ろしい巖頭に掴み出される…ツル／＼と體は滑る…アツと

叫んで真逆様に千切の溪底へ…危険に目を閉て顔ふ…

鐘掛の大難所を漸やく無事に越て更に進んで行くと岩道の真中に玉垣をめぐらしてある處に出る、夫れはお龜石と稱なへ生靈が付いてあると云つて參詣者が非常に尊敬して居る、名の如く龜の形をした岩、其處で又歌だ！

お龜石、踏な叩く杖つくな、

あけて通れよ新客の者、

お龜石から一二丁程行くと屹巖六千尺の巨岩が一方に突き出てゐる、それが大峯山で名高い西の覗で山嶺一角の大巖頭である、其前面は稻村ヶ嶽と相對して三里下の洞川村は眼下に見へて其間白雲の往來するの偉大の光景、其巖頭に先達は登山者を集め、然して其一人／＼匍匐さして前に進ましめるのだ、其時の新客は更に又膽を冷して奈何なる事かと餘りの事に茫乎としてゐる、と事に馴て居る山案内者は大きな寂のある聲で、

『さあ、最つと前へ出るのだ』

と云つて尻を押す、押されて止なく恐る／＼猶も匍ひ出ると、其岩の端は向ふ下りになつてゐるでツル／＼と體は滑る、其氣味の悪るさ八萬地獄、奈落の底に落ち込むにも増して筆や言葉で形容出来ぬ、アツと叫んで真逆様に千切の溪に落下せんとする刹那、行場案内者は其右の手で落込まんとする新客の玉襷にかゝる、そして其左の手で足を驚掴みにして、グツとまだ以上突き出して其岩の下にまつて、あると云ふ不動明王を拜めと命令する。其時まだ拜まれぬ、見へぬとでも云

へば猶も突き出す。下見れば幾百間の断崖絶壁、瘦た木の間から白雲昇る、落ち込めば無論粉葉微塵、其死骸さへも得られぬ、其戰慄する危険の岩の端に突き出して下の不動の有無を嘗て事實に見た人のないものを拜めと云はれて拜まれるものか、皆目を閉て顫ふ斗り、其處で先達は高音聲に嚴かに

「新客心得よ、月々七日と二十八日には精進するを忘るなよ、第一親には孝行、百姓するとも人の耕地に障るな、商賣しても二丁廻しを使ふな、お山の事を家へ歸つても必ず話すなよ、決して喧嘩口論大酒呑むな」

と云ひ聞かしてから又歌を誦へさす、其時の聲は涙聲だ
有難や西の靦に懺悔して

彌陀の淨土に入るぞ嬉しき

夫れが濟と其處から丁餘の處にある寺院にて一休するのだ、其寺院と云ふものか、いる山頂、土氣のない板張りの風雪に堪わられるやうにした見た處粗末な建物だ、其中で晝飯も食すのだ、

▲命懸の山上裏行場の難關

…危険極まる蟻の戸渡り…龜のやうに天空を舞される…思ひ出して慄とする…死する命は不動くりから…ラブライムの山頂御

花畑の壯觀

これで大峯山頂の難關は終ではない、本堂は近くに見へてあるが、新客はまだ以上より怖ろしい行場を濟さねば本堂に詣でられぬ、其怖しい行場とは本堂裏にある十八ヶ所の行場で道は東南院の上を右に通じてある、それを辿つて行くと又岩となつて第一にかゝるが不動の登り岩、次が不動の岩谷で、其中に岩を傳ふて流る水滴が溜つて黒澄だ油をなしてゐる、それを越すと、押分岩、人一人、それも横にならねば這入れられぬ、次が胎内くいと云つて、氣持の悪い形した岩窟、中は暗い、匍匐にならねば通れぬ、其暗中也小暫くで明るくなると、數十丈の岩の下に出る、それが袈裟掛岩、衣掛岩、御馬屋と稱へられてゐる、案内者に其ワケも無い説明を聞されつゝ、今度至るが笈の岩谷と云つて、丁度其岩を脊に摺つて通ら

ねばならぬ處、次が御丈岩、賽の河原と云ふ處で、猶も進むと天の川と云つて斜に川のやうになつた岩、次が裏のお龜石、大黒岩谷等で其次が飛石と云つて一間程下に飛ばねばならぬ、飛び損じたら、千仞の溪底、今は餘り危険であるからと云つて梯子をしつらへてある、それをヤツと下ると東の覗、これも危険で今迄幾多の人を溪底へ沈めたから人は行かぬ、案内者も登らぬ、其次の行場蟻の戸渡と云つて、至つて危険だ、丁度鐘掛のやうな絶壁、其岩の凹凸を掴んで登る、漸やくにしてそれを登りつめたと思へば二三尺岩が切れてゐる、其切れ目より下見れば深い深い底知れぬ溪、それを怖るゝ足を跨げて向の岩の端に一生懸命に縋り付くと其岩がガタ／＼と云つてガタ／＼と動揺する、爲めにアツと誰れもが驚くと上から案内者が襷を掴んで安全な處にやつて呉れる、ヤレ／＼と一安心するかせぬかに今度は更に怖るゝ命懸と云ふ平等岩、屹壁の岩の端が空間に突出して往來する雲間に屹と立つてゐる、其岩の極端を上から案内者が持つて呉れる襷と岩にかゝる片足の指先で體を支へて廻るのだ、小さい子供なんかは其足もかゝ

らず只掴まれる襷のみで龜のやうに天空で遊泳する如き様、思ひ出しても慄とす、其岩頭を廻りつゝ歌を唱へさゝれる、
平等岩まわつて見ればあこ瀧の
死する命は不動くりから、

かんと怖しい處でないか、參る處の多いのに山上參りする馬鹿があるとは實にやう云つてゐる、それにもかゝら、わらず此危険を犯しつゝ、毎年全國より登山する新客が數万人とは實に其間所謂一種の神秘の靈瑞が籠つてゐるのか、其他信仰強い先達間には三十度、四十度も登山した者の夥多あるとは驚くべき事だ、怖るべき平等岩の次が元結拂ひと云ふ所で昔し此處に於いて鬚の元結を斷つて其處に納め山伏となつて本堂に詣たのであるそうだ、本堂は夫れより半町足らぬ處で堂宇の大き二三十間もある一大梵閣で、瓦は青銅で其立派さ實に此山頂にて、其頃これがやうまあと誰れもが膽を冷すのである、其他役の行者が突いたと云ふ巨大な鐵製の鐸杖、僕の方では持ち上る事さへ出来ぬ、其上に行者が肩にして持

ち上つたと云ふ鐘等は驚くの外はない、其本堂で開帳を拜してから、山頂御花畑に行つた、其一帶は一尺位の熊笹斗りで其間に種々な高山植物の珍花が咲いてある、其處に於いて客年大阪毎日新聞記者が高山生活をしたと云ふ記念の立木がある、其四隣の景色の美は一日に七遍山相が變ると子守唄で聞いたが七遍處ではない、雲の去來に變る山相は又云ふべからざる大觀で御花畑の一端にある破れ岩と云へる處よりは一望、遠いく紀淡海峽や、大阪灣迄も指呼の間に開展して見える雄大壯美は筆紙につくし難ない、其ラブライムの頂を僕は例の俳人と跋渉しつゝスケッチして廻つて東南院山坊に這入た。

▲恐怖すべき山上の怪便所

…小便はお先へ流れるが大便是ベタリ〜…勇を鼓してグルリと尻を捲る…猛烈なる虻群…便所中より夥多の大きな怪物が飛出す…アツと戦慄…

戦慄すべき鐘掛の大危険、西の覗の大冒険、さては恐怖すべき命懸の裏行場、本

堂の不可思議等に奴膽を奪れたる大峯登山者は其他に更に怖るべく、戦慄すべき一大醜所が山頂に隠れてあるのだ、大醜所！如何なる處か？、

靈山と稱へられる此山頂に去る奇怪な處があるとは、大峯信者の激怒するであろう、それは山頂にある便所だ、而かく恐怖すべき便所、ごんな怪奇の便所か？、用便中、下より怪物が出るの歎！

天狗が棲んで居ると云ふ山だ、便所の怪物大に出るのだ、爲めに初めての用便者は膽を冷して戦慄するのだ、

六千四百尺山巔奇變に富んだ大峯山、水と云へば雨水より外はない、其水少なき山上に數万の人を集める、それ等の人は靈山として幾何信仰を捧げて居つても大便がもやうし來るを堪える事は出來無い、それが用の大便所は各寺院の裏手にあつて雨でないと水の通ない溝に便が落ちるべく旨く建られてある、けれども其雨が降つて水が出て溜つた大便を流し去る迄は小便は流動でお先に落流して了ふが大便是ベタ〜と重なり積つて其醜臭は靈山を汚しつゝある、夫れが醜臭を慕つ

て集り來たる蛇や銀蠅其他の不潔動物の夥多は殆んど万以上で便所内踏板や溜つた人糞の上に蟬集して居る、僕はそんな事を知らずして其便所に這入つた、其刹那數百の蛇蠅はバツと驚き飛び出た、

『これは烈い』

と思つて止そうかと思はれたが頻りに催しくる臀部の調子に中止も出来ず、勇を鼓してグルリ尻を捲つて大便を浚出した、それが便所下に蟬集する數万の怪物の頭から降りかけた、爲めに怪物は驚き一時にブンと騒ぎ立つて用便中の僕の尻と云わず顔と云わずにブチ當る其時の心持ち、危険な不場の苦しみよりも又心持ち悪くて思わす戦慄した、其怪物たる蛇蠅は此山特産とも云われる位いの大きなものにて岡寺の團子蜂以上のも澤山見受けた、實に怖るべき便所で、たしかに奇變に富む大峯 中の秘中の一大名物である、何と物凄い光景では無いか、

僕は其怪便所の話しを東南院に歸つて連れの俳人や案内者に云つた、丁度其時僕と同じやうに便氣を催して居つた俳人君は爲めに辛さを忍んで見合した、其處へ山上の特色、山男の武骨漢の手に成れる拙い珍妙な精神料理が配られた、けれども便所の珍事を思ひ出せば其食事は喉へ通らないで酒斗りを無理に流し込んで、早や〜と促がす案内者に應じて御花畑よりは餘り參詣者が行かない奥通り越して目指すは大臺探險に熊笹の繁茂を分けて、大峯迄と云つた俳人大學生君を無理に連れて進んで行くのだ。

▲名さへ恐しい鬼輪谷の天嶮

…水の一升も一度に飲みたい…大峯奥の院…人跡全く絶わた

深山路…

天は晴れて太陽は爛と輝いて居るが高山の氣は寒い、風は強い、道は岩で瘦た柵が枝振面白く生てある、他は熊笹計り、其中には高山植物の珍花が咲いてある、其中を辿る僕等は東南院で少し飲し召した御酒がはつと廻つて其氣持のよい事は

酷暑中氷の御殿で心のままの遊樂するよりも増りて大自然界の天恵に浴するのである、其壯快云はむ方なく勞れし足も躍りて絶快を大呼したが、それはほんの少しの間で、十町程來たら酒氣は覺て疲勞を感じて來た、喉は渴いて足は重くなつて來る、呼吸は困難、動氣は烈しくなつて、さらでも酔醒めの水を求むるが其上此の有様だから、水の一升も一度に呑みたくなつて來た、けれども此處山頂で水の氣一滴ない、其苦しさ譬へ様がない、けれども致方がない奥の院小笹迄行かねば奈何する事も出來ない、止なく苦しさで喘ぐ強い呼吸で幸くも二十五町の奥の院小笹に着いた、

奥の院と云つたら人でも居るかのやうに思つて居つたが人一人も居らぬ、久しく甚大な自然の翻弄に任した小さな堂と籠所だけで何にもない、其小舎で少暫らく休んで居ると、大學生君は腹が痛むと云ひ出した、さあ大變だ、這座山の中で病氣になられたら大變だと心配して居る内に幸ひ其場で烈しい下痢をした許りで腹痛は止んだ、それに安心した一行は、さあ行こうと又も疲勞の身を引いて進んで

行くと何處から流れて來る水か知らぬが、岩間を潜る水の音、

『これ天恵だ』

と云つて音を慕ふて漸やくに搜した溪流、早速に呑んだ其水の冷たさ、氷のやうだ、其清淨しさ水晶のやうだ、それでやうく蘇生の思ひ、これから猶も峰續きで人跡全く絶へた深山路を辿り、名さへ恐しい鬼輪谷に對する叔母が覗と云つてあの怖ろしい大峰の第一の難所の行場たる東の覗、それにも増した危険で膽玉がデングリ返ると云ふ斷崖萬仞の壯絶雄大なる巖頭に行くのである、

▲脚下に雲舞ふ叔母が覗

：山中で友人の急病：こんな處で重くなつたら見殺だ：連峯

高嶽の天波浪：肉一片も拾ふ事は出來ない

大峰の峰續き足跡全く絶わたる小笹からの奥、道と云ふよりも岩間を流れる雨水の道と云ひ度い徑だ、其處を傳ふて十町も來たであろう、時しも又大學生君は腹がしく、痛み出したと云つて顔を顰る、僕は『歩けるか？』と問ふたら『無理

せば行けない事はない』と云ふ其聲は如何にも苦しうな、けれども致方が無い此場合それじやと云つて休める處もない、いづれにしても五里は此の山路を辿らねば人家がない、勿論僕は出發に際して馬杉ドクトルから豫備薬は頂戴したが、それが健胃劑と解熱劑と消毒藥ガーゼ縋帶布とで如何とも出来ない少しは慘酷でも歩ける處迄無理に歩いてもらわねばならぬ、糧食の用意もない旅空致方ないといふものゝ無理に引張つて來た僕の立場として非常に苦しい、案内者は腹痛に悩む大學生君を助けつゝ。

『確乎りしなさい、こんな處で重くなつたら見殺にせなくちやなりません、貴郎の病氣で手間暇取れて夜にでもなつたら、狼だすせ！』

實際其通りだ、大峯本堂迄引返すにしても一里以上もある、又柏木の里迄はまだ四里以上、それが人跡絶わな名高い深山。其上時間も最う午後の四時過ぎである奈何する事も出来ない。

これには僕斗りでない山馴た案内者もほとゝ弱つた、又病人も其致方ないに苦

しい體を喘ぎつゝ、步調を緩めて案内者の肩を便りに歩く、僕はそれが心細い先頭となつて瘦せた梅、樅の林を分け猪踏道の險を犯して進むのだ、

それが數町で、道は一步で懸崖萬仞の溪底と云ふ叔母が峯の叔母が覗へ出たのだ此の叔母覗は前にも云つた通り、大峯の行場たる東西の覗の比位ではない、數

十間の道、それが一人一人通る位の其岩徑が絶壁六千尺の巔になるのだ、前は鬼輪谷に面した三塚山で名高い釋迦が嶽の高峯は鬼輪の後に雲を突いて聳へてこ

ざる、又東南を望めば紀伊山脈の連峯重なり合つて一大波浪のやうだ、其中に大臺山も見へる又鬱然とした熊野の深山は藍色に聳へて在る其廣義雄大は大峯山頂

御花畑の觀望に筆を投げた僕は更にくそれより以上の此光景に驚歎するのだ、脚下には雲霧が舞ふて足許見れば慄とする、無論一步誤れば身は粉碎で肉一片も拾ふ事は出来ない……。

▲深山中で道を失ふ

…僕のスケッチの大氣焰…最う十町くくくと深山路を辿る

杉林の中で蟾蜍を踏んで仆る……

「フワアー……これは奈何だ……」と此叔母が覗き、絶壁岩頭に立つた三人が餘りの雄大なる壯觀に一樣に叫んだも決して不思議ではない、僕は此處で腰を据て畫囊から繪具其他を取り出してスケッチするのだ、案内者は畫面と前望と僕の顔とを見て「先生寫すつて、一體何處から書きなされるのじや」と不思議そうに、僕もこれには面食つた、かゝる場合眼前一分を寫したかて何等の價値がない眼界廣大の壯觀を總て寫してこそ人に示し又其畫を見る人をして其場に望んだ僕と同じ感想を起さすのだ、それは知つて居るが、里川の流れや田園の小景を畫にして居る計りの僕等は實に面食ふのも無理はない、かゝる時に望んでのスケッチ法は在來日本の畫家が探究した事はない、皆想像に任して筆を執つて居るのだ、實際に望んだ畫家が少ないから致方がない、此處に其實地に望んだ僕として不熟な筆ながら其眞を寫さんと畫筆を執つたが中々に思ひのまゝにはならない、分時に日光や雲霧に變る深山帯の色彩の變化それを漸やくに寫し得て大學生君はと見れば句作

處ではない、腹痛で腹を抱へて苦呻してござる、水はと云つても水筒を筆洗にして了つたで飲料にはならない、

「痛むか……」

と問ふたら

「痛む、苦しい」

そのみ又も此處でそれが爲め心配した其して稍其苦痛の薄らぐを待つて六千尺まだ四里の急坂を木の根岩角道なき難路を辿つて降つた、路中水と云つては一滴もないする内に日は西に傾く、人家らしいもの處か一人猫の子一匹にも逢はぬ、其心細さ只案内者を命として行くのだ、案内者は最う十町くと云つて引張つて行く内に、

「そら下のあの杉林の分れた處が熊野街道です最う柏木は近いです街道に出たら安心です」

と云つて呉れた、それで稍々元氣付いて滑るがやうに下つて行くと道が二つにな

つてある、其道を案内者が踏迷うて深い杉林の中へ一行を入れた、注意迄に云つて置く深山中で杉林のある處は里や街道とは餘り遠く放れてないと云ふ事だ其して山も餘り深くないと云ふ事だ其杉林の中で大きな蟻蜂を案内者が踏んで仆れた、幸ひに負傷が無かつて安心した、

深い杉林の中に迷ひ込んだ、僕等は其山馴た案内者に依つて小暫らくで街道へ出で一安心、

時に日は最う暮れそうだ、街道に沿ふての大杉林は夕霧に包まれて凄然として其樹間を縫ふて吹き来る風は暑中とは云へ寒い、其間を十四五町、北へ辿つて柏木村に這入つて大臺教會の指定宿となつてある山村の旅館に投宿した、

其夜は晝の疲勞に食後すぐ寢に着いた、時の大學生君の病氣は痛はよくなつたがまだ腹の調子が悪いとて飯も食わずに寢に着いた、

其明る朝も矢張不可ないとて生玉子二個を食した計り、此の身體では到底大臺へは同行が出来ないと云ふから、止なく吉野から付いて來て呉れた案内者を途中又

の變事を心配して其大學生君に附隨さして別れた、

▲▲▲地底の壯觀水晶菊の大洞窟▲▲▲

：暗黒なる洞窟へ松明翳して這入る：岩が六角に結晶してある

菊と牡丹の狂ひ咲き：

さて一行を歸した僕は其柏木附近に散在する三大洞窟を探險するべく案内者を雇ふてスケッチブックの外は總て宿に置きて蠟燭、松明等用意して先づ第一に水晶の窟に入るべく柏木から少し川下に向ひ和田と云ふ村に渡つてから三四丁山に這入た、

川上七里の溪谷間の此四方は蒼鬱たる深林に掩れ山又山に圍まれてある、其山麓より、雲を突いて屹立する一大斷崖の巖底にある水晶の窟、其門にて松明に點火しつ暗黒凄然たる奥に松明翳して恁々と這入るのだ。

奥からは冷たい風が吹いてくる、窟内進むに従つてだん／＼と迫つて來て中途頃よりは匍匐だ、其中を辿る事、一二町も思ふた時に案内者はこれが水晶の窟

であると、松明で四方を照して示すを見れば數坪の廣窟中に來て居る、天井は丈餘も高くなつてある、其一帶の岩石は水晶のやうに總てが六角に結晶して、それに松明の光と窟間の岩を傳ふ水とが調和して五色に輝くの美觀、これが地下暗黒界で見える事が出来る其奇觀に歎歎した、

やがて元の道を辿りて窟外に出て再び柏木に歸り、それより川に沿ふて數町、其街道の横に小さな窟の門がある、其處で同じく松明に點火して這入つた、窟は進むに従つて地底下方に降つてゐる、其間身を僅に入れるに足る位の暗黒岩道、足は這る、危険だ、其處を町餘も進むと

『これが菊の窟である、四方一面、菊と牡丹の亂れ咲きでござる』

案内者は示す、

『それが』

と見る窟中は矢張り數坪の廣さで、其兩側に幾百と重なりつゝある菊花の形をした岩、中に牡丹の花形をしたのもある、これ又水晶に劣らぬ奇觀だ。其天井に渡

り龍と云つて、龍の形をした岩、又窟途中に、釣鐘、いらたかのすい、鱧口、鐘の尾、法螺、逆の蓮等云ふ名を附せられた岩がある、それ等を見てから外に出たさて此次に行かんとするのは危険極まる不動の大洞窟だ、

▲▲▲地底暗黒界の大瀑布▲▲▲

：怖い不動の窟：八萬地獄奈落の底に這り落つ：窟中破れるや
うな大音響：巾三間直下三十間の不動の瀧

菊の窟から七八丁、川に沿ふて南へ兩側森林に圍まれたる街道を進み行くと險巖傳ひに川の方へタラ〜と降る徑がある、其處を半町も降ると小さな門、丁度お伽噺の畫にある鬼の窟ソツクリ、それを通つて猶も下ると殆んど川の水面と平均の處の巖底にある見るから恐しそうな窟、これが不動の窟の入口だ、上を見れば絶壁斷崖、鬱蒼と繁れる大杉、前は吉野川、其川を隔た對岸より雲衝いて聳ゆる屹巖鋸齒の如き川上の一大奇巖、屏風岩、其巖底を洗ひ、又川面に散在する巨大なる奇岩を噛むやうに流れる水勢は急躍飛激して、滔々音立て凄しく流れ、窟の

奥よりは冷たい風が吹いて出る、
 人と云つても僕と案内者の二人限り、菊や水晶ではさのみ思はなかつたが、此不動の窟斗りは這入らぬ前から云ひ知れの凄味を覺へた、
 例に依つて案内者は松明を點火した、

「さあ、これからです」

と先に立つて這入る、僕も蠟燭に火を點じて其後より這入る、一間程で一の門、門と云ふても岩が自然に門のやうになつてあるからだ、其一の門からは窟が狭つてくる、其門の傍に大鐘と名付けた奇岩がある、それから又四五間程で二の門、其處には逆錫杖、行者の負櫃と云ふ岩がある、次が三の門、それから前下りの急險な狭い窟、最う匍匐にならねば行けぬ、其處を越して五六間程行くと窟は地底下部に向つて井戸のやうだ、松明翳して見れば只黒暗瞑凄として何物も見へない、其穴に案内者は松明立て、其岩にしつらへられた雁木を傳ふて瞑凄の暗中に這るが如く下り入つた、僕も致方ない、案内者のする通りを真似て下ると今度は

胎内くいと云つて身一つ入れるにも腹を地に摺らなければ這入られない處、それも無難に越すと今度は足と手を岩に當て這り込むの大冒險をやらねばならぬ、

「何に大丈夫です」

と云つた案内者はズル／＼と這り落ちた、僕も其尾に付いて岩に足を任して身を横にして死んで八萬地獄奈落の底に落ち込む心持ちで降下する、其時の心持ちと云つたら……

「あッ」

と思つて膽を冷す内に足の先は底の岩に當つた、そして體は止つた、やれ嬉しやと一安心する間もなく、更に再度より以上驚愕した、それは奥に當つて滔々と凄ましく響く大音響だ、音響斗りでない、窟中が破れるやうに震動する、

これ山崩れか？

吾等地上光明界にあつて、豫想なし得られぬ地中の不可解たる不見の状態が、此所に突如としてはしなく瞑暗の地中が破壊なしつゝあるの歟！と此場合思はれて

僕は戦慄した、

僕の其強く魂消たのを見た案内者は、

『あの音はこれから行く窟中にある瀧の音です、最う少しです、確乎してお出な
さう』

初めて僕は其説明に奇怪の音響の解決がした、それで又づんくと進む、二三十
間も進んだであろう、橋のやうなものがある、無論人が作つた板橋、それを渡る
と暗澹廣袤たる一大廣窟中に出た、其廣さ四五十坪もあろう、

其所に出て音する方を松明にて照し見れば、横三間もあろうと思ふ一大瀑布は窟
中の氣を逆巻いて猛然と凄まじく落下してゐる、無論直下は暗黒界で不分明だが
案内者の云ふには其直下三十間との事、眞偽は知らぬが聞たるまゝを記すのだ、
其強烈、怖凄、不可思議、暗黒、瞑忙たる不動が洞窟の瀑布に對した時の感、言
語に絶した深大の奇觀で、其中に一種の神秘と靈瑞とが籠られてあるかのやうで
痛絶極まれる快感を僕は覺るのだ、

これが所謂不動ヶ窟の不動ヶ瀧である

▲此世で見られぬ三途の川に無情の橋

：地底暗黒界の道連れとは只二人：死を以て葬られ今や幽瞑を
迎るのみ：無情の橋は丸太三本：一步誤れば命は暗から暗へ：
怖ろしい三途の川：これで窟の終りだと聞いた時の嬉しさ…

地底の大瀑布、不動ヶ瀧！其奇觀に驚きつゝ、

『これで、最う歸るのだらう』

と恐怖の思ひに案内者に問ふた、

『いやこれから、まだ奥に面白い處があるから、さあ行きまじやう』

と僕を促して瀧の吐沫に幾度ともなく消へんとする松明を振り翳しつゝ先に立つ
て廣窟中の險巖を踏んで進んで行く、これ實に吉野川より水面一二町も地底奥深
かく潜行して居るのだ、其上まだ以上奥に這入るに對しての道連れと云ふは案内
者と只二人、それが凄腹極まれる暗黒界、其心細さと云つたらない、一人で引返

す事は到底出来ぬ、先に進んで行く案内者に付いて行かねばならぬ。其詮方なさにトボくと案内者に付いて進む僕の足は其時或は顫ふてあつたであろう、さて斯くして初めてかゝるは、瀑布の水が激躍して當る岩をも粉碎して押流さんばかりの勢で流れてある、其激流に丸木三本で橋が架けられてある、其橋は無情の橋で下の流れが三途の川!

聞いた時には自分は最う此世から死を以て葬られて今や幽冥界を辿るやうに思われて松明醫す案内者は強暴極まる冷酷なる鬼のやうにも思れる、其怖しい三途の川の無情の橋は水垢の爲め恐るゝ渡る其足は這る、若しもそれが爲一步誤れば暗から暗へ……其死骸は激流に翻弄せられ岩に當てられて粉碎せられて地下の何邊に葬られるか……實に言語に絶した怖るべき危険な橋だ、其橋迄で大概の探險者が恐れて以上の深入を中止するそうだ、其橋も案内者に助けられつゝ漸やくに無事に渡れば、又身を入れるさへ困難な窟となる、其窟には雁木が打つてあつて道は金米糖のやうで然かも登りだ、これも一步足を誤れば岩に傷付けられて

三途の川に真逆様……

戦々恟々として其間十五六間も進むと又二三十坪の大窟窟に出る、其中には岩が自然に不動明王の形をして兩脇に大高童子、小高童子がある、天上には渡り龍、登り龍、十三佛、其他それ等に因んだ岩が澤山あつて、此窟が所謂不動ヶ窟だ、

これから以上は行けない、窟は了りだ、引返すのだと案内者の説明を聞いた時は嬉しかつた、けれども再度前の危険の道を引返すと思へば中々に安心じやない、只其無事を祈るのみであつた、

やがて不安に戦々兢々として窟を潜つて光明界に出た、其時の心、蘇生の思ひだ澄み渡つた天空に屹立する絶壁の連峯、翠深かき深林、さては純碧清浄なる吉野川等見る目一新せられて、巖然として、其色彩光明の自然の配素と恩恵を天に對して感謝するのである、と一方暗黒界を過ぎ來た其窟中の難關は光明界に再來して初めて其壯快の感を喚起せしめるのだ、其感想たるや、幽冥現世と殊にせる暗黒界の自然がなせる窟中の深刻痛絶不可思議中に神?、魔か不可解なる自然界偉

大の或ものが、其隙隙中に潜みつゝある如く思はしめるは絶大の快趣味にてそれ等に對して各専門的に探險せば又學界の資料として得る處多からん、斯くして三大洞險探險終つた僕は川向ひ上の谷の山腹にある金剛寺と云ふ古刹に詣でた、

▲▲▲由緒深い金剛寺▲▲▲

…後醍醐天皇御歸依の古刹：御本尊は龍乘地藏尊：南朝末路と金剛寺

金剛寺は高野金剛峯等に屬して眞言宗だ、本尊は龍乘地藏菩薩で高さ五尺一寸五分の不楠の幹で彫刻せられた尊像である、今の院主は渡邊大心と云へる僧で其前迄某墮落坊主に依つて頽廢され此の名古刹も世に現れずしてあつたを大心師に依つて今や其發展の端を開いたのだ、抑も此寺と云ふは白鳳二年役の行者が大峯山開山の時、大龍に乗つて天より地藏尊が當地に降下せられ其後毎夜赫灼たる光明の發するを見たのでこれ奇瑞なりとて當地

に來て其光發す地を掘開いたら十一面觀音の小像と奇石とが出た奇石には岩と云ふ天然の文字がある、(今も寶物として秘藏されてある)それから其地藏像を役の行者自ら石南木の古木を以て彫刻し同七年二月に堂宇を草創して大峯山奥の院妹脊山大乘院と號したそうだ、其後延元年中に後醍醐天皇吉野山遷都の時深かく此寺に御歸依遊ばされ再三行幸し給ひ秘佛御覽せられた上金剛寺と改稱せられたそは秘佛十一面の聖像は黄金であつたが爲である、又境内の上には後醍醐帝九世の御孫自天親王の御陵がある、そは長祿元年十二月尊季王、所謂自天親王反逆の賊に殺害せられ其首級の賊の手にあるを此處の郷士に取戻され葬り奉れる處である、それ等に關した南朝末路に於ける一大悲史は此後日親しく搜る事が出來たので其委くは別項、噫々南朝の末路と題して卷末に記載した、斯くの如き史蹟と由緒正しき此古刹中々に詣て得る處が多い、本堂其他の建築等は優に古美術參考の資となる、

春は櫻秋は楓等の古木に圍まれて風景も又殊によい、都市に近い社寺の如く俗氣

が無くて一種の感興が起る、此處を見てから、宿に歸り其明る日所謂八月廿一日午前六時いよ／＼南東七里に聳へてある大臺山に攀登すべく一人の案内者に連れられ朝露深く立ち籠めた山間を川に傳ふて街道を十七八丁上ると道が二つになつてある其左を矢張り川に沿ふて進るのである、

●深山大帯ケ原山

▲登攀中途僕を案内者が困らせる

：洪水に流失した入の波温泉：橋は落ちてそれに横へた一本の

丸木：これからの案内断然謝絶：千古の鬱林：不安心の安心橋：

柏木を出て三里来たであろう、其處に入の波と云ふ村がある、其村中に入の波温泉と云ふのがあつて、浴槽は洪水の爲め先年流失し、今改築中だて眞に粗末ではあるが、やがて落成の上は登山者に多大の快味を興ふるであろう、入の波も過ぎて五十町程に筏場と云つて、山から切り出した木材を板に挽き、或は木材其儘に筏に組んで吉野川に下す處がある、其處には人の二三十人も居つて

水力を使つて盛んにやつてゐる、其處迄はそれ等が爲めで道も可いが、それから大臺に登山する者と熊野より來たる魚の行商人位いの外、餘り人の通行がない従つて道は悪い、山も峻しい、途中、川中の岩を飛びつゝ渡らねばならぬ處もある、それ等を渡り進んで筏場から十七八丁も來たであろう、處に橋は落ちて、それに換へられた一本の丸木橋、下を見れば絶壁の深溪、岩に當りて躍進する溪流は凄しい、見ても眩暈するやうな溪、無論一步誤れば身は粉碎せられる恐しい處じや、此處迄は大に氣焔を吐きつゝ僕を連れ來た案内者も

『命に換はれませんが、こんなに橋が落ちてあると知らば私は案内するのじやなかつた』

と云つて、これからの案内は断然謝絶と云ひ出した、

『此處迄來て置いて今更中止とは如何にも残念じや、よしや危い丸木橋とは云へ人の通れる橋だ、それが通れない事はない……』

『けれども貴郎、私はこれでも子もあり孫もある老人です、それは渡れない事

はないですが、若し萬一、それが爲め此の溪底に落ちて死んだら人は酷人じやと云つて跡で子や孫が笑れます』

とつイツカナ應じない、これには殆んど僕は失望したが致方がない、誰れを代りに頼む事も出来ない交通全く絶たれた此の深山、止なく筏場迄僕は引歸して案内者を求めたが無い、途方に暮れて居る處へ柏木附近の青年で、農林學校の學生が勝手知つたる山道、單獨で大臺へ行くべく登つて來た、これ幸ひと其學生に付いて案内者を棄て危険の橋を渡つて川に沿ふた嶮岩道を辿つて登るのだ、道は筏場より二十町餘りで川に別れて急峻な登りとなる、夫れを登るにつれて、山の相はだん／＼と變つてくる、辿る一步づゝ高くなつて、谷も從つて深くなる、最う此邊迄登れば杉の木は一本もない、モミ、ツガ、シラカシ、アカカシ、ケヤキ、コウヤマキ、アキニレトチ、ホウ、ヒメシヤラサカキ、ヒノキ、ソロ、シヒ、カツラ、ミヅキ、モミヂ、ウバメカシ、フサザクラ、ヤマクルマ、ヤブニケイ、其他の雜木にて、氣候もだん／＼冷たくなつてくる、其間を分けて攀登する氣持、中

々に快趣味で、丁度其僕が登つた日は筏場少し上より深山帯の定まり無き天候は雲を呼んで何時か雨は沛然として降り出した、

其雨に濡れつゝ大臺と熊野、吉野との振り分け道も過ぎて、登る程に樹木は變つてきてモミ、ツガの類が少なくなつて來て、高山帯植物、ブナ、タウビ、アラ、ギ、ハウチバカヘデ等が加わりマンサク、ソクバナ、ミチカヘデ、ミヤマシキビ、ツゲ、シナヂ、シヤクナギ等が下木をなして、又或る部にはコマツガの純林を形成するも見受けた、それ等の樹林は曾て斧の入れられたることのない處で、其鬱林幾百千年なるか知り難くない、實に林業専門家の喉を鳴らす處であらうと考へつゝ、最う山頂であらう／＼とよち／＼と辿りつゝ、安心橋と云ふ橋に來て木標を見れば、まだ一里と記されてある、殆んどこれには滅入らん計りに魂消たが致方がない、這麼處で夜でも更せば狼の腹に葬られると、氣を取直して猶も進むのだ、

▲▲▲天涯無邊雲上の壯觀▲▲▲

…山頂の猛雨烈風…天空只一人風雨と高山の冷氣に戰慄す…

…黒き大なるもの雲を衝いて出現す
 折りから雨は益々急に、それにつれて高山帯吹き付ける烈風は山を鳴らし、雲霧を巻いて辿る僕等を溪底に吹落さんとして凄涼慘憺として全山爲めに總て雲霧に閉ざれつ、前歩尺餘の外、何物も消滅し去つて天空只一人、風雨と高山の冷氣に戦慄せしめらるるのだ、

其時、此の天涯無邊、壯烈暗曠廣袤たる山嶺に立つて自然が鳴らす強烈なる風聲を聞いて果して吾等青年として何等の感想を思ひ浮ぶる歟、恐か？快か？其何處にしても浮薄輕卒なる都市社會に在つての如く總て單調子に非ずして至大に深刻であると、暫し立ち止つて感想にふける、折しも前面雲霧の風に薄らぐ間に黒き大なる物の雲を突いて出現す！これを見た僕は思はず、アツと叫喚の聲を發したこれ此の驚きは登山の前に聞いて承知はして居つたが、聞しに勝る大なるに驚かざるを得なかつた、其大なる物とは何んであるか？これ今を去る十數年以前人跡全く足を入れざる此山頂に而かも嚴寒の候白衣一枚と白米一升二合との外何

等一物も持たず單獨に九十二日間山中の大自然と戦ひ探險をした、仙人とでも云ふか天狗とでも云ふか奇傑古川嵩其人の經營に依つて明治二十六年より三十二年に至る七年間の長年月と七萬圓の費用とで建られた大臺教會其本堂である、其大なるは只々驚嘆する斗りで廣さは十二間に十三間で其外二階建の庫裏、事務所、浴室、廊下等完備せられてある、これが普通平坦の地に建られたとすれば驚くに至らぬが、今ですら我身一つ攀登するに命懸け戦々兢々であるのに、其頃而かも七千尺の山嶺にこれがと初めて見た僕としては叫喚したのは無理ではあるまい。

▲山嶺に一輪の姫百合、天女？女神？妙齡の處女

…大臺教會本堂…廊下に絹の裳の音…仙人か？天狗？默然たる

怪翁…潑刺たる鮎の美肴…

さて本堂に辿り着いてから刺を通じて來訪の旨を取次に云つたら、早速に本堂裏客殿上段の間に通してから『嘸かし御疲勞、先づ御湯を』とてフランチールの湯上りを出して與へられた。早速に雨に濡れた衣をそれと着換へ數間の廊下を傳ふて

浴室に行く途中は高山帯此處此頃五十四度の寒氣と吹き巻る烈風に其寒さ云はむ方なく、それを上加減の湯に温めて座敷に歸つた、座敷の真中にはあら、木の大火鉢に今し次れた切炭はキン／＼と燃氣を吐いて居る、折りから廊下に絹の裳の音がした、其音は障子の前ではたと止つたと同時に障子は靜かに外から開けられた、誰れかと打ち見て又も『アツ』と驚かされた、驚くも道理此の深山中の山嶺雲霧風雨雪氷寒寂の自然界偉大の暴れるに任された此處に在つて嵩氏其人の怪勇に驚きつゝあるに今し障子開けて這入つて來た夫れは芳紀正に十七八都市に在つては如何もあらむが目元の涼しい口元キツと閉つた色白の圓顔、少しく憂を帯びては居れど夫れが心中の優美を表現するかの如き妙齡の處女これ人？天女？此の場合、それを疑ふのも無理なき事ではない、これなん古川氏令嬢芳野子十八歳其人である。此の少女に關しては卷末の、我國深山帯の處女の文中に詳細く紹介した其處女がさし出す茶に僕は口を沾した時這入つて來た木綿紋付羽織を着た年の頃五十に近い年輩、薄髭を無造作に生した奥目の鋭い眼光と如何にも能辯らしい唇

は薄く閉されて默然たる怪翁、それが此教會長古川嵩其人であつたのだ、これが其怪傑大臺教會長？今日成功した教會長、嘸かし紫の袴に殿めしい殊更威嚴を装はんとする人かのやうに思つて居つたが此の質朴、何等一點の飾りの無いに怪翁の人格が見られて眞に鞍馬山で牛若丸が、仙人に逢ふが如き感想を喚起せしめて、敬慕の念が起つたのも不思議ではないのだ、其天狗の如き、又仙人の如き怪翁古川行者と此時初對面の挨拶を済ましてやがて運ばれた潑瀾たる鮎其他の美肴を味はひつゝ氏の探險苦心談を杯を換しつゝ聞くのである、

●大臺原山の怪翁探險譚

- ▲狂者か？自殺者か？妻子を棄て山に入る
- …強賊石川五右衛門と同星の大臺行者…御嶽へ祈願…親族知人に見放さる…白衣の單衣一枚の乞食姿…

氏は岐阜縣郡上郡嵩田村古川七兵衛と云ふ百姓家の二男である、氏が生れた其頃土地の迷信が盛んな時で親が四十二歳の時二歳の子供のある家は家が亡るとか國

が亂れるとか云て非常に嫌つた、當時不幸嵩氏の十二歳の時其父が四十二歳で其上氏の年廻りが申の年の五黄の星で夫れも極く人の厭ふたのである、昔の強賊石川五右衛門も其星であつたとか、夫れが爲め不幸、両親の愛手より放され町某商店に奉公に出された其頃の雇人を使ふのは今のやうでは無い、殆んど奴隸的制度で氏は非常に苦使せられ終に病を得て哀れ天晴れこれから世に立ちて有望の、青年時代を葬り去られんとした、所が土地での言ひ慣はせに病者が御嶽へ登つたら病が全快すると云ふを聞いて居た古川氏、身動きたに苦しき體を起して御嶽へ登つて山巔に祭れる社前に額付き

『若し吾が病全快したら其御禮として一生日本の山中に這入つて人の知らぬ山奥を開きましやう』

この誓を立て下山した、夫れがはからずも其後病が全快したので日本國中の高山巡拜に出かけたが思はしい山が無い、する内に親族や知人は其愚を咎めて國に呼び寄せ家を持たして妻まで迎へさしたが、氏の山行者は治らない、兎角する内

に親族知人も氏を見放すやうになつた、かゝる有様であるから、家計は詰つて来る、けれどもそんな事には一寸もお構いないので終は妻子を養ふ事計りか己れ一身の寒暑を凌ぐ衣類さへ無き哀れの男となつた、時しも人より聞けば大和の大臺ヶ原山は吾國の大深山で其して明治十五年没した伊勢の人松浦氏が探險登攀して難行苦行をしたと云ふことで、それを耳にした氏はたまらない、これは是非乃公の探險すべき山なんめりと、孤影飄然として妻子を棄て、白衣の單衣一枚のみで去る明治二十四年冬の頃國許を立去つて伊勢大廟に詣で、成功を祈り、小鷲を過ぎ北山の山間を傳ふて小椽村の役場へ行つて、村長に逢ひ其頃人跡殆ど絶て強大なる自然力の暴れるに任された大臺山に登攀する旨を語つた、所がこれを聞いた村長や村民は其無謀に驚きて狂者? 乞食? 其いづれにしても山中で死骸となるは必然だ、此の男食ふに困つて山中で自殺を謀りに來たのではないかと迄疑れ、其登山を許されないのだ、夫れを種々と無理に辯疏して白米一升二合と食鹽一升を乞ひ受け寒風吹き荒さむ大臺ヶ原なる山奥へ入つたのだ、

暴れて暴れたる山中、辿るに徑なく岩の間木の根が雪や氷で閉された中を事どもせず先に松浦翁が攀登した時親切にも樹木に刀痕を印せられてあるを便つて漸やくに山頂今の名古屋谷に來たのだ、時に日は既に西に沈んで寂寥を破る山頂の暴風に鳴る恐しの樹々の音を聞きつゝ、折りしも降る吹雪に巻かれて天を仰ぎつ自己が信ずる神を念づるのである、さてこれから怪翁は如何するか、左に豪膽なる氏が膽玉轉操り返つたと云ふ面白い實話と恐ろしい狼群の襲來を書こう。

山を鳴らし雲を巻き吹き頻る山頂夜中の烈風は物凄きと云わむよりは、吾人の不可解として疑問？に付し居る偉大強烈なる神？魔？、所謂る宇宙を作り地球を作り然して其中に小さき形成を持つて靈ある吾等動物を作りたりと云ふ、其主の暴れて總てを破壊せむとするが如く感じられるのである、其中に在つて其主に救を求むべく然かく黙禱する？、怪翁古川嵩氏は凍れる岩木の上に皮薄き體に白單衣一枚を被ひて其夜は事なく明した、明れば風は夜よりは較々薄ぎたれど灰色の雲の千切れて飛び舞ふかのごとき雪はシトシと降り頻り、積ること數尺に及び一

望白皚々として總てを包んで了つた、其中に在つて飢れば携へて來た一升二合の白米の内より少量を鐵瓶に入れ、其中に食鹽と氷雪を入れて焚火に掛けそれにて僅に飢たる腹を支へ晝は山頂を跋涉し夜は岩間の庵で安然靜座して神靈に祈禱を捧げるのである

▲天狗の怪物？深夜用便中毛の生てある手が罌丸を撫る

…豪膽の行者の驚き…黑膽たる山頂の怪音…罌丸を撫る怪物の手をクソツと掴んだ…

或る夜祈禱中の古川行者は頻りに大便が催して來たので庵を立ち出で岩間に渡す丸木二本其上に跨がり寒風肉を裂くが如き外氣に尻を捲りて用便を濟さむとするのである折りしも遠く吼哮する狼群の聲は山に響きて今し用便中の古川行者の肉を顛はしめるのである、其時も折り便所尻下に當つて怪しき物音がした、ハテと打ち覗けども夜中の暗黒界、素より豪膽なる氏は氣に止めなかつたが其怪音と共に氏の尻から罌丸をかけて毛の生てある手かの如き物が撫たのだ、これには如何

なる氏も驚き慄とした、けれども勉めて心を静め、これ我が神經の成せるのであらうと思ひ居ると再度其怪しの手如き物か翠丸を撫るのだ『おやッこれは己が神經の爲ではない』と驚き膽玉を轉繰返して思へらく、これ山頂に棲む天狗其者の戯せる術ならん己れ怪物か天狗か知らぬが夫れ以上自覺する此の古川嵩の翠丸を握まんとは餘りに愚弄するも小癩なり、いで引擱んで此嵩が目に物見せて呉れん』と翻然として恐より怒りに變つて今し撫つゝある其の怪手を強よく「クソッ」と計り握つた氏は『おやッ』と再度魂消したのである、魂消るのも道理天狗か怪物かと思つて擱んだ其物は怪物の手にはあらで晝夜用便の時蠅虻の來たるを防がんと爲め熊笹の枝葉を以てやつて居つた夫が便中に落ち込んで風の吹くに揺れて今用便する氏が尻から翠丸に觸る夫れを怪物と思つて擱んだのだ、聞いて見れば馬鹿にしたやうな話したが此の場合素より一字の教育も受けない氏が腦に夫れと思つたのも無理はない、夫れに依つて氏は自己の智の至らぬのと膽の小なるを自覺して決して天狗や怪物は居ないものだと思ひ、確信して行を續けたのだ。

▲危険々々！狼群の襲來肉薄

…氷雪に凍へる草庵に静座した行者…溪に餌を求めて哮吼する

狼の聲はだん／＼と近寄る…牙を剃き鼻を鳴らした一團の狼群

…生命は身體の一微動に窮る…大急々危険…

氏は其以來怪物や天狗は居らぬものと確信はしたが、其頃の大臺山頂は熊や狼や猪の栖家となつてあるのだ、其山頂で苦行を續ける或る夜例に依つて冷水に沐浴してから火の氣のない草庵の板間に静座して居ると雪に鎖された山中飢に泣く狼の哮吼は溪間に響くのだ、飢たる腹を肥やさむと餌を捜すのであらう、狼の食物は總て肉食で然かも其肉は生ある動物計りを食すると云ふ最も慘酷齷齪なる猛獸であるのだ、溪に餌を求めて哮吼する狼の聲はだん／＼と近寄つて來たと思ふ内古川行者の居る其人嗅き臭を知つてか鼻を鳴らした一匹の狼は雪を蹴つて草庵の前に現れた、其して氏の姿を見た彼狼は牙を剃きて強く一聲哮吼した、其聲響の反響と返つて消ない間に足音高く馳け來た一團の狼群皆牙を剃き鼻を鳴らし

然かも其夜のみに止まらず毎夜襲來したのであつたが、終りには狼群も屈したるにや古川行者に馴染て來て些の害を興へざるのみではない却て血汐の滴る鹿や何かの肉塊を他より咬へて來て飢へた行者を養はんとするやうになつたのである、これ此の膽力があつて今日の古川氏とはなつたのだ。

登山の時携へ來た一升二合の白米を始めは少しづつ食して居つたが、眞の行は穀類を口にしては折角の苦行も無にならんかとして遂には夫れさへ食せず殆んど斷食の難行を敢行する時に當つて、此の山に栖む熊が大木を洞窟にて其中に蟄居して木皮を嘗て生活して居るを見た氏は、思へらく屹度其樹木の幹には生物の命を保つ液汁があつて熊の奴めが之を嘗て命を繋いで居るのであるう、であつたら人間が食しても毒ではないであろう、聞けば昔し役の小角が大峯山中に籠つた時自らの病を治さんと植物から取つた藥それが今日のだからにすけであつたからと思ひ浮んだ氏は、熊の洞窟にして栖んで居る樹と同じ樹の幹に一日ぬを以て傷付け下に鐵瓶を受けて一夜を待つたら其鐵瓶七分目程の液汁が溜つた、夫れを煮詰たら

蜂蜜のやうであつて味はいと云つたら蜂蜜にも増した美味であつた、其以來毎日續けて其美味なる液汁を取つて食したのだ、其樹は四双樹深山楓等の高山植物であつたそうのだ。

▲▲▲ 獨體の怪物…怪行者の幽靈

…久しき苦行に瘦せて骨立つ…睫毛迄嚴寒に脱毛す…役の行者の二代目生神様

斯くして永き九十餘日間山中に在つて苦行を續けてから小柄に下山したのだ、其時の氏の姿は久しき苦行に瘦せて骨立ち毛髪は嚴寒の爲め睫毛迄も脱て恰も獨體の如く一見生ある人間とは思はれん程であつた、この氏の姿を見た小柄の村民は大臺の怪物天狗が現れたと驚き恐れたが氏は去る者ではない過般一升二合の米を乞ひ受けて大臺山中に這入つた行者であると云つたら、更に又驚き怖れてより以上の恐怖を極めた、そは彼等村民は最早や行者は山中で死骸となつた者として近々其死骸を搜索に大舉して登らんとして居る矢先、此の獨體のやうになつて下山

して来た氏を見て、怪行者の幽霊と思つたのだ、で氏は之を可笑しく思ひ決して幽霊ではない斯々であると、山頂で難行苦行漸やくに一行を終つて下山したのであると云つたら、這度は村民は氏を役の行者の二代目だ、これは神様だ人間ではないと態度一變大に氏を祟拜し始めた、夫れからと云ふものは今でも程度の極く低い山村の住民ではあるが今から思へば馬鹿らしいやうな者の、其彼等は古川行者を生神様と祟拜で加持や祈禱と云つて氏に乞ふ者が澤山出来て遂には大和伊勢の間に知られて第一歩の氏が活展の道を開いたのだ。

▲古川行者東京市中を横行す

…帝都の怪装：市民の冷評熱罵：屈辱を忍ぶも行の一つだ…

此處に於いて氏は大臺山の開拓の有望なるを説き、其第一着に山上に神霊を奉せむとし本朝肇造の三神を齋き祭りてから、明治二十二年十一月氏は探検登山の當時着せしまゝの白衣と腰衣のみの行装で以て神道教本部の直轄の資格を得んと幽玄なる山中より出て紅塵萬丈繁雜極る帝都に上り毎日市中を横行するのだ、其氏

が怪装を見た市民は彼奴は何者か、乞食？氣狂？と怪まれ、爲めに歩行する後よりは野次馬連や悪太郎が付廻つて乞食だ狂者じやと云つて冷評熱罵を加へるのだけれども氏は實に之れに對して何と云ふ辯解も爲なかつた、是れ畢竟此の屈辱を忍ぶのも行の一つであると黙忍したので毫も顧るなく只目的に向つて猛進するのみであつた、何分にも勝手知らざる都大路に迷ひつゝ幾日か懸つて漸やく神道神宮教會長の家を探し出して、其玄關にて氏が例の大聲で以て案内を求めた、之に應じて出て来たのが白衣黒羽織に袴着た此處の下教師兼玄關番先生だ。

▲教會本堂の建設

…東京神宮教會玄關番を吹き飛す：川上土倉氏の賛成：本堂の

建築七ヶ年間…

神道神宮教會の玄關番先生今し大聲で案内を乞ひつゝある古川行者の怪装を見て乞食と見誤まつて勝手へ廻れと云つた、これを聞いた行者は忽ち其赧ら顔を脹らして大喝一聲『無禮者奴、苟しくも今役の行者と稱はれる大臺山の開拓者古川嵩

と云ふを知らぬ、此馬鹿野郎啾々云はず此書狀を管長に取次げろツ』と云つて土倉氏其他有爵者の添書を差し付けた、案内者は譯分らずに其權脈の凄さに驚き、行者の云ふまゝ其手紙を受取つて奥へ行き其由管長芳村某に告げた、管長は其添書を見て早速、奥に通し面會して教會の直轄たる許可を興へた、それで行者は嬉び勇み急ぎ大和に歸つて其由有志者に告げ以て大臺教會なるものを興し廣く講員を募集して其講員信者の寄附金を以て山頂に明治二十六年四月より本堂の建立に着手して同三十二年に至る七ヶ年の間に數萬金を投じて現時の宏大壯麗なる堂宇を落成せしめたのだ、現今信者は實に三萬人の多に達すと云ふことである。

行者が此の壯舉に非常に賛成せし土倉庄三郎氏の如きは一萬圓の巨費を寄附して山頂に通すべき道路を開鑿し、此の全山を世界的の一大公園と爲し内外人觀光の勝地とせしめると同時に、我國學生が夏季六十日を徒費さすのは惜むべき事であるから、寧ろ當山の如き盛夏尙春時の季候に均しき處に之を迎へ、立派なる教師に依つて夏季講習大會を設立せば其教育界に益する事多大ならんと設計の折り

しも、不幸土倉氏が財政上の失敗に逢つて中止されたを深くも古川氏は遺憾とし今之れが計畫中だとのこと、斯て國に残した妻子を迎へ悠々此の山頂で生活して居る古川行者が今日に至る苦心經歷談は這麼次第で、這麼奇行で今日になつた行者は山上各所に植物の試作場を設け、自ら耕耘に従事し、秋田蔞、北海道、大根等は殊に發育がよい、其他、林檎等も今試作栽培中であるとの事、又同時に圖書館を設置せんとし、孤兒院を創立せんとし、又氷豆腐製造所並ひに蠶種貯藏所等も企畫中である、又満山の熊笹を利用して辨當行李、籠、魚籠等の手工品を製出せんと謀る等凡て世を益し、人を利するの手段、又伊勢の製紙會社は此山頂より其原料を切出すべく近々設置せんとする輕便鐵道の開道を待つて、世界的に發展せんとの大氣焔は、實に役の行者の亞流とも云ふ近世の英傑ではないか、無論かゝる經歷に成功した人だから深く文字は解さないがこれを其實演者の行者と盃を換して聞く僕は壯快の感に打たれて肉の躍る計りであつた、其明る日此怪行者古川氏に連れられ大臺高原東西三里南北四里に渉る高頂の名所見物に出かけ

た。

●大臺山頂の名所

▲富士が見へる日の出岳の壯觀
 …青氈を布いたやうな正木ヶ原…牛石ヶ原の奇石…日の出岳山
 嶺三角臺に攀つ…

さて明る日、東西三里南北四里の大臺ヶ原山頂雲上の一大廣原を、此の怪傑古川行者に案内せられて其の名所を探險なすべく、帝大生徒等と共に跋涉したのである、其時の行者は腰切り筒袖、草鞋脚絆、腰には山刀、結繩等用意して居る。雨は上つてゐるが、濃い密雲は視下の群山を掩ふてゐる、時、八月下旬であるが山頂の氣候六十度弱で、吹く風は冷たい、其中を英氣凛々として進むのだ。第一にかゝるは正木ヶ原と云つて、熊笹叢生して恰も青氈を布いたがやうな廣大平坦なる原で、其處には小池がある、昔し義經が吉野を越へて此處迄逃れ來て此池に片腹の鯛を放つたと云ふが妄誕信するに足らぬ傳説だ、それも大臺の名所の

一つだ、其正木ヶ原より十數丁歩で、牛石ヶ原と云つて正木原よりも一層美麗な平原で其廣さも前者に比すれば更に廣大で、高山植物の珍花は其熊笹の間に咲いて又其中に數本の松檜が枝葉整然と、恰も名築庭家の手に依つて修せられたるのやうに繁つてゐるは又無き美觀である、其中に牛石と云つて牛の形をした石がある、又、御腰掛石と云つて皇祖建國創業の時、此原にて畏れ多くも神武天皇が御腰を掛けられ賊徒平定の作戦を議せられたと云傳て居る、其他御手洗池や、松浦氏が山籠したと云ふ小舎もある、それ等を見て松檜の大森林たる巴ヶ岳に登りて其奥に聳ゆる大臺高原中の最大高地點たる日の出ヶ岳に登攀するのだ。

巴ヶ岳、松檜の密林を過ぐれば一帯の熊笹計り、其間を分けて日の出岳山嶺に登つた、其山頂には陸軍參謀本部の三角臺がある、一行は山よりも更により高く其巍然たる三角臺上に登つて四方を見れば、其時幸ひ窟雲高く昇りて爲めに四方の群峰は子視せられて遠く渺茫として四十八州を一時に觀望せしめた、これ更に晴天の日ならば遠く富士山、御嶽、駒ヶ嶽、白山等が判然と見られるのだが、それ

かあらぬかの如く朦朧となり、天候の爲め望む事が出来なかつたは、遺憾千萬だ
此處より富士の觀望の秀麗は僕が下山の後大毎の記者が登つて實見したと云ふ、
が、其觀望は雨氣多き山頂なれば中々に見ゆる日は少ないそうだと。
雨氣に霞みながらにも見ゆる、廣大無邊、雲か？水か？其定かならず見ゆる、
大平洋上に、深く白帆は點々と遠く近く指呼の間に馳走するの壯觀、又熊野一帯
の港灣島嶼、さては漁舟の波間に隱顯する狀、宛然一大パノラマのやうで、而か
も其風趣の雄渾偉大壯絶なるは驚歎の外はない。
三角臺上に攀ぢた一行は皆其至大の絶景に感歎したさうして笹の上に下りて辨當
を開き舌鼓み打ちつゝ、各々氣焰を吐きて壯語したは痛快極まる男子的肉躍する大
壯遊であつた、折りから東面の深間より立ち昇つた一抹の雲霧は瞬間、忽ちにし
て此の大景を掩ひ去つた。
『夫れ早く行かんと又降りますぞ』
と行者の聲に

『つらば』

とて一行掩ひくる雲を分けて降下するのだ。

▲大蛇ヶ巖の大巖壁

：此處で狼群に襲來された：大臺山千古の記念：益裁家の喉を
鳴らす竹根や眞白が澤山ある：深さの知れない大絶壁

日の出岳から掩ひくる雲霧の間を掻き分けて降つた一行は、松檜の深森を縫ふが、
やうに辿つて七ツ池と云ふ處に出て、それから開拓と云ふ廣原を過ぎて維新以來
國に殉して斃れた志士の爲め塔婆を建てある經ヶ塚を見、御經ヶ岳の中を潜つて
溪流に面した名古屋谷といへる地へ出た、其處には明治十七年伊勢の人、松浦武
四郎(贈從五位開拓判官)氏が古川氏よりも先じて登山し遍く探検せし時、其名古
屋谷に庵を建て夫れに起居して能く困苦に堪へ意氣豪壯たりしが其年齢七十餘の
老體にて終に克く此大抱負の實行を見ずして山頂庵に斃る、其庵空の殘礎今猶其
谷に存在してある、後十津川の人西村浩平氏等發起して松浦翁の碑を名古屋谷の

上部へ建てた、古苔叢樹の間に聳立つ一大碑が翁が大臺山に業を成した千古の記念品である。其松浦翁の山籠の庵室で古川行者が九十七日間居つたのだ、其大さは二坪位で溪に面した處にある。

「此處で私しが怖しい狼群に襲れたのだ」

と昨夜の話しを再度其苦行談を行者がする、成る程と一行は感歎する。

其傍りに二十坪程の試作場が二ヶ所ある、四方には柵を圍ぐらし、秋田路や、北海豆が行者の言の如く實地に生長してゐる、それ等を見て、松檜、あら、木、石

楠の珍樹の間を分けて、盆栽家の喉を鳴らす、櫛、眞白其他の混生してある岩道

を傳つて出たのが、巉崖絶壁の一大巖頭、即ち大蛇ヶ巖だ。

其巖頭よりの深さ幾千尋なるかを計られず、下を見れば白雲が揺曳して、瘦せた

木の先が見へる、試に石を投じて其響を聞かんとしたが、大石の落下したのみで

其反響が聞へなかつた。

▲直下八丁十六間大臺山中の大瀑布

…雲漠々…巖頭に座して動かざるの事岩のやうだ…一吹の風に

雲霧は開く…屹立六千尺の不動返しの一大巨巖…瀧壺迄は七里

の溪谷を辿られば行けぬ…

大臺山嶺、大蛇ヶ巖が巖頭に相對する向嶽、右方頂より直下する三大瀑布がある

のだ、僕等一行が其巖頭に立ちし時は其前面一帯は雲霧に鎖されて、何等一點の

物も見へない、雲漠々として暴れたる大洋に浮ぶ船中の觀のやうだ。

これを見た古川行者は、折角の探檢なるに天のなせる自然の術とは云へ、餘りに

自然が此の狀の山を思はさるも甚だし、此の嵩が案内なし來たれる深厚なる心を

山雲知るあらば、少暫く雲を避よ…と云つて一心不亂に何か默禱して、巖頭に

座し、動ざる事岩のやうであつた。

一行はこれを見て其奇行を笑つたのであつたが、不可思議や、偶然か？それとも

天に、山靈に、行者の心通じてか？……

二十分間程にて、一吹の風と共に雲霧は前面空間へ昇つて開展した、それに依つて出現する屹立六千尺の不動返しの一大斷崖絶壁の巨巖、次いで前面連嶽の深林、其右方巖頭より瀑々猛下する大臺、中の瀧、其中途に一腰打たしつゝあるが其直下四百九十六間、所謂八丁十六間、尺に直して二千七百餘尺の一大瀑布は白布を下げたる如く垂下するの雄大、絶美の壯觀はそれに止らず、其東西に猶二瀑布が落下してある至大の壯觀、實に魂飛び、膽寒からしめるのである、其見ゆる瀑布の瀧壺下迄行かんに實に七里の溪谷を辿らざれば瀧壺に達せざる由、其三大瀑布は集まつて音無川、宮川、吉野川の三大河の水源となつてあるとは、以て其絶大なるを知るに足る、これ等三大瀑布の水を利用して水力電力に資せんと其大工事計畫されたるが冬季の氷結の爲め其用に缺くとして中止せられたが、若しこれが成功せしならば大臺山全山イルミ子イションして全國人心を驚嘆せしめる事であろう。

やがて再び雲霧に閉されたから本堂に歸つた、

▲大臺教會に與ふ最後の一言

…美觀極まる石楠の花…墓蛙は大臺の名物…大臺大天狗の氣焰

…宗教界革命の大負擔…

大臺名所は此外に御料岳、日本鼻、國見岳等あり其山頂の春時百花爛熳たるの候には石楠の美花滿地に咲き、又秋時楓樹其他の紅葉する様は到底口舌筆紙の能く之を形容することが出来ない況んや夏時暑熱を知ら、又赤手溪間にて鮭魚を捕漁なし得るの快事は都人士の夢想にだに上らざる處で、又山頂熊笹の間より飛び出す、墓蛙は其數限りを知らず、昔し牛大の大墓蛙が山頂に栖たとはこれ等に依つて誇大に傳聞された談説であろう、其他總ての感想は大峯山と又一變して、深刻で、偉大で平凡ではないのだ。

實に吾人が一度は登山を試み、其自然界、偉大の賜に得る大なるを知らねばならぬと、同時に怪傑古川行者が今後を自覺して、雲上六千尺の山巔に住む、天人として、將た宗教家として天下に大天狗氣取つて氣焰を吐かんに、須からく此の

一大自然界を活用して、人心の墮落極まれる現代の悪思潮を破壊し、以て活達雄健なる思想を鼓吹して、大臺教會が現代宗教界の革命を標榜するとの大抱負と主義が六千尺雲上にて實現せんことの……吾人は幾多の希望を將來に囑するのである。

あゝ雲上の大學園たらむか？雲上の大公園たらんか？

僕は此の大臺教會に四五日遊んで柏木に降り、南朝の史跡を搜りて川上七里の長溪を川に沿ふて歸途に就いた、それが史跡と其深山帯中の處女の觀察は項を改めて卷末に載せたで此稿はこれにて擲筆する。

噫々南朝の末路

其一 皇祖南朝が遺訓

萬世一系皇統連綿として 今上聖代の今日に至る、二千五百六十有餘年、其間中殊に其が國史を飾り是非共に波瀾多くして畏れ多くも我が皇室の御悲劇を止めたるは實に後醍醐帝より四代に渡らせ給ふ南朝其御一統が末路に於ける迄の御經歷にて其當時南朝を擁して起れる忠臣義士は皆これ我が國史に赫然たる光輝を放ち以て後世の人意に對するの發奮教訓の財となりて吾人は夫れに依つて多大に指導せられ居るなり、嗚呼其忠孝義烈の精華は日本魂武士道として國民は其忠烈なる祖先の遺訓を奉じ以て夫れに依つて大氣を張りて太平洋上の一孤島たる我日本が今日戰捷國として隆々全世界に發展雄飛し先進列強國と地歩を共にして世界各國を驚歎せしめたる絶大偉大強烈壯美の明治現代に至りて我が皇威は八紘を蔽ひ國光六合に洽く天壤と共に窮りなきは職として立國の大本宇

内萬邦に卓絶せる大和魂の精華に由らばならず、これ皇祖皇宗の遺徳にして萬古不磨の垂訓に依るや論を俟ず、これが皇祖たりて身は九重の雲上の玉體にましますなるが畏れ多くも御悲慘なる御逆境の爲め有ゆる御艱苦を嘗され遂に御悲しき御末路に亡び給ひたる南朝が御一統こそ實に吾等臣民の感泣措ざる處なり、されど其が南朝が御悲境にましましてよく下民に對する慈仁の御心厚かりし爲め、臣民感激して忠誠の誠を孕ましめ凝つて忠孝義烈の國の精華をより多く發揚して今日の國民の氣風の源となりて 今上の聖帝よく維新の大業を開かせ給ふに至り玉ふ、吾等臣民伏して惟るに、今上の聖帝が、大業の成就是は我皇祖皇宗の遺訓が礎へとなりたるに依るの大なると遙察なし奉るなり、夫れ等畏れ多き御事蹟を遙察なし奉りなば、南朝が御一統こそ其御犠牲の深大なる御事にて、悲惨なる南朝が末路に至る間の御艱苦には更に至大に吾等日本民族の感泣激謝奉り以て今後も永く其遺徳を世に傳へ墮民に覺醒を與へると同時に皇室が尊嚴帝國の品位を高めるべく南朝が遺蹟を發揚なし奉りて其が聖

靈を吊し奉るはこれ實に戊申大詔に奉從する吾人臣民の務めならずや、されど南朝が事蹟たるや事此處に至らざる以前に疾に官民一致して其發揚に務め既に遺憾なからむとせるが其末路に於ける事蹟の餘りに多く現れあらざるは、これを知る吾人の甚だ遺憾として平素常に長大息なるところなり、抑南朝が末路たるや後醍醐帝より九代に渡らせ給ふの皇孫自天親王尊秀卿に在しまして吉野の奥川上の溪間にて御悲慘極まる御最後の慘憺たる終局に其が正統全たく絶させ給ひて御墓の今も歴然と神の谷なる金剛寺境内に在れど深山の溪間に隠されて訪ふ人の外知る由も無きとは返すくも我が 皇室が尊嚴の爲め畏れ多き極ならずや、予や山行者として不圖らずも此地に歴訪せし時この御墓に參拜なしてこれが南朝の御正統の末路なるを知りて後久しく滞在し其が史蹟を御搜り奉りて此處に南朝の末路と題して未だ多く知られざる事蹟を世に傳へ皇孫自天親王が如何に慘憺たる悲境に苦呻せられたると此時夫れを擁護せる此の山中溪谷の土民川上二十三ヶ村民が祿を食み位を着るの堂々たる武人よりも誠忠の熱烈た

りしを知らしめて現代國民が志氣の發奮に資すると共に聖意を奉持して皇祖が遺訓の明著ならむを期し以て史を搜る識者が參考に備へ同時に吉野川上七里の長溪の絶景と由緒正しき金剛寺とを紹介して世に隠れたる史跡を此處に研究せんとす。

其二 竹の園生の御皇孫惡將軍足利が迫害に熊狼栖む深山に落ち給ふ

抑も南朝末路の正統尊秀王と申し奉るは、後龜山天皇の皇子小倉の宮の御孫にて在して父君を萬壽寺の宮と申奉り、御龜山帝の曾孫に當らせて永享十二乙申二月五日御誕辰のらせられ御母君は近江國甲賀郡深山に在る山村氏の女、武内の末世なりといふ初め後龜山帝が北朝の御和睦を許し給ひ御位を北朝後小松帝に譲らせ給ふ時に當り今後は帝位を南北更るゝ立て共に深交せんと、堅く誓せ給ひしに其後足利が專斷にも其が聖約を蹂躪して、稱光花園二帝とも北朝の皇胤を立つるの無暴の舉に出でしかば南朝の遺臣等憤激やる方なきを抑制しつゝ利非を

言明して聖約の如くせんことを請ひしも強暴專横極りなき足利、元より皇室の累を醸すの如何を顧ず己が私情の欲するまゝに國政總てを專斷せる浮華荒怠、彼いかに其が請ひを聴くべきされば遂に止なく伊勢の國司北畠氏等小倉の宮を擁して南朝を興復せんとを謀りしも事成ずして破る、其後藤原有光、楠次郎等宮が御子萬壽寺の宮、所謂尊秀王が御父君を奉じて中興王と稱し或る夜禁中に忍び入り皇位の御寶三種の神璽を奪ひて、叡山に據り義兵を擧ぐ、斯くと知つたる足利は早速にこれを攻め遂に陥し入れければ御痛しや萬壽寺の宮は悲憤に浪立つ御胸を掻き開き「斯くなりては詮無き事、此上に夢々賊が手に掛るは口惜し」とて畏れ多くも自刃し給ひければ有光等も宮が御跡を慕ひて割腹して悲惨の最後を遂たり、此時御跡に残され給ひし萬壽寺の宮が御子尊秀王、忠義王、尊雅王の三御兄弟は父宮の憤死に強くも御悲歎あらせ給しかど、何分にも未だ御幼なく、又股肱の臣も多くは斃れたるに如何ともせん術なく、其上に惡逆なる足利は南朝が遺業を討滅せむと計る事甚だしく爲めに憐れ御痛はしや竹の園生の御兄弟打連れ立ち伊勢路

に落ちさせ民家に隠れ給ひしかど其處にも早やく、足利は郷士の有司に下知なし
て其が御幼なき御三王を討ち奉らむとするにぞ又も居堪らず其が虎穴を逃れさせ
給ひて伊勢路より名にしおふ北山の險巖屹立せる深山路を踏み分けて大和に徙ら
せ給ひ、先づ御三王大臺山麓入之波村の奥三の公に隠れられて後御兄弟別れ
て尊秀王は吉野の奥大河内に出させ給ひ南方一の宮と稱へ又北山の宮自天王と稱
へられ御座所は今の北山郷小椽村龍泉寺に在したり第二忠義王は龍泉寺より八里
隔りたる川上郷河野谷に隠れ給ひて河野之宮二の宮と稱し奉る今の神之谷金剛寺
の在る處それなり、第三尊雅王は三の公に滞在まして三の宮と稱へ今此處に三社
ありそは初めて三宮隠れ給ひしに依るなり、噫々！暴戻反逆の惡漢足利が迫害の
爲め此の深山幽谷中に懐かしき御兄弟別れくは夜は群狼の吼ゆるを耳にして猪
や熊栖む中に有ゆる御艱難を嘗め神璽を擁護し御玉體を忍ばせ給ふとはさても御
痛ましの限りならずや、これ實に御境遇とは言ひながら我が皇室として九重の雲
上宮中の玉殿に下萬氏の尊敬を受させらるゝ皇孫に在し有すとは餘りに御悲境も

極にて長多き事ならずや、此時の三御兄弟が御心中如何ありつるや察し參らすも
涙の止め難き事ならずや。

其三 龍泉寺内の兇變

さるにてやまだ此上に御悲痛極まる御兄弟を奈落の淵に沈め奉らむと謀る一大惡
逆の臣下があつた、そは是れより先、嘉吉元年六月播州の國司赤松滿祐と云ふ奸
人があつた彼は自個が浮華を極めんとて時の醜將軍足利六代の義教公を暗殺して
懸望得たりと思笑つゝ領地に少暫し隠れんとて引籠り中其が足利に腹臣の畠山持
國細川持之の兩人事の大事に驚き急ぎ主君足利が敵を討たむとて右兩名其將とな
り川名持豊外士卒に下知して播州に攻寄せたれば一打の下に赤松脆くも破られ滿
祐誅せられて領國沒收せらる其時赤松が弟三郎法師丸は爲に郎徒石見太郎左衛門
雅助等と共に浪人となり居たるが斯くては頭の上らぬに、止なく三條實量公に泣
き付き赤松が家斷絶なしたるを歎じ其が興復を計りたるに實量公答へて曰く「汝
が一族嘉吉が謀叛に依り斯くなりたる今の悲境なるに興復とは思ひも依らず、さ

りながら其が罪に換ふる奉公有らば再び復活の策なきにあらず」と云ふに石見答へて申せしには「吾等其罪を購ふ策あり、そは南方大和に在す南朝が遺跡尊秀王を弑して神璽を取返し足利に献上せば如何に」と云ふを實量公聞召して事を將軍義政公に告げければ、義政公「然らば其勳功と赤松が家の再興とに換へん」との約成りたれば、石見等は大喜にて早速義勇勝りたる等徒内の間島政則、中村貞友兩名に命じて郎徒の數十人を従へさせ、南方大和路に長録元年十一月上旬向はせたり、此處に於て中村は間島を郎徒と共に同廿四日新宮村に残し置き、期に至るを見て通知した、上首尾善く目的を達せんとして先づ自分一人其地、士人自身を變装して郷士を欺き龍泉寺王が許に來たり言巧みに奉仕せんことを請ひしに、かゝる奸策あるとは神ならぬ尊秀王は氣付給わす、彼を御側近かく奉仕するやう許されたるこそ是非もなき、此處に於いて中村は兇行に便なるべく、後期至たりと新宮にある間島に傳へた、時は寒風吹すさみ灰色の空の雲は千切れて飛ぶ吹雪は舞ふて四方總て白皚々の銀世界、頃は十二月二日、占し合したは其日の夜、

寺内の寢靜まるを待つて窺つと起出で裏門開けた赤松は疾にも其處に待ち居る間島と郎徒を迎へ入れて要所には郎徒に見張らしめ、二人にて拔足差足内殿深かく王の御座所に忍び入り今やすやくと安けき眠りに入らせ給ふ御枕元にて持ちたる毒刃を振り翳し「今ぞ」と打ち寄り其御寢呼吸を窺ふのである、御痛ましや御宮の命は風前の燈火よ……此時外の積雪の吹雪に崩壊を打ちて落つる凄然たる音と共にハツタと斗り兩人は宮が御枕を蹴るなり打ち下す毒刃、噫々憐れ宮が御肩先深く斬り込んだれば……「アツ……」と計りに發し給ふ御悲鳴と共に鮮血は御身を染めた……夫れ得たりと二の太刀を猶も打ち下さんとする刹那！瞬間！宮は痛傷を堪わつゝ二三歩後へ飛下りさま御枕邊の刀打ち執り給ひ、
「な、な、何奴なるぞ無禮者……苟しくも日本一天四海を知食す萬世一系の御皇君が皇孫自天親王尊秀なるぞ、其吾れに刃向ふ汝等の狼藉慮外千萬なるに然かも余が寢首を刺さんとは卑怯未練のは、は、反逆の賊徒！」と叫ばせ給ふ、
「をう、小賢しくも御申されたりな我等二人は赤松左京太夫滿祐が郎徒中村五郎

貞友同じく間島次郎政則と申者、足利將軍が命に依り、畏れ多くも宮を弑し奉り三種の神器を奪ひ取りて北朝に奉上し其功に依りて一度滅亡せし赤松が家を興さむとて斯くての手段、最早斯くなりては詮なき事御宮御覺悟あらせられよ、」

「さでありしか、赤松の臣とな、皇政聖事を蹂躪する惡將軍足利と醜劣の争ひに破れ領國沒收一族滅亡せられたる賊徒が殘徒なるか、己れ其が醜劣なる家の再興を試みむとて畏れ多くも南朝が皇孫を弑して強惡專横なる足利に諂らひ組せんとは返すくも汝等が毒心、かゝる匹夫下郎が此在所の土踏むさへも汚らはしきに然かも一刃たりとも汝等が毒刃に害はれたるとは殘念千萬、猶其上に萬世一系の皇寶たる三種の神器を奪取らむとは以ての外、よしや余が命亡するともいかに汝等に手渡べきか………」と御無念に光る御眼、きつと睨れたるも不意の深傷と御無念とに躍る胸の鼓動につれて迸り出る血糊の泉と流れ、又持せ給ふ御手も打ちわななきつゝ御哀れや御生氣の次第に遠ざかり行くのである、斯くと見た彼等惡漢は事遅れては大事なりと間島が先に強烈の氣満た毒刃に猶も満身の大氣を

張りて御弱られた宮が胸部を狙つて「ゑい」と突込み來た其氣合を敏くも知られた宮は踰跟つゝ體を翻して其強刃に空を突せた、「失策つたり」と空を突く間島は其力と共に唐紙に柄を透して腕迄突込んだ、「ゑい、不甲斐無い」と赤松は怒りて又も宮が面前向つて切り込んだるを同じく體を翻された瞬間に手にせる太刀を抜かれた宮は今し空に切り込み踰跟く赤松二ツになれと斗り「ゑい」と切り下された刃は御不運なるかな赤松が頭部深く切り込むべきを、敷居の鳴居に遮られた爲め其が鳴居深く切り入つた「失策たり」と切り入つた刃は抜んと氣を焦せつて居られる後より此期逃すなとて間島は唐紙に突いた刃を反して再び切込んだ、後に目の無い御宮何條堪べきか、又も肩先深く切り込まれ、「あッ」との再度の御悲鳴に血煙立して其場に堂と御倒れられたを這度は赤松乗掛つて無慘や未だ花の蕾青春の氣漸やく燃なんとする御齡十八歳に渡らせ給ふ宮が御首打ち落したのである、如何に有爲轉變の世なりとは云へ此の慘禍の御最後、噫々！餘りに御痛ましき次第である(御宮が切り込まれた鳴居の刀痕は今猶龍泉寺内に在る)

其四 忠憤凝つたる誠義の決戦

斯くて強惡暴逆の賊徒中村、間島の兩名は悠々として自天王が御首と三種の神器とを奪ひ、一旦北山小瀬村に引き揚げ、翌三日急ぎ都に歸り事成就を足利に告げ神器と御首を奉上せむとて揚々として叔母峯の天險に差掛るや連日降り頻る雪に強烈なる大臺風の烈風加はりて猛惡なる吹雪となり暗愴凄然として山を鳴し峯を轟かして暴れに暴れ狂ひに狂ふのである、これ即ち宮が神靈の致す處なりしか？夫れが爲めさしもの彼等も天災には如何ともせん術なく止なく一行叔母谷村に降りて逗留する事となつた。

不意の慘禍を被むりて龍泉寺内は宮の御悲惨なる横死の變に驚きたる寺内其他の臣等は其が兇惡なる賊徒の捜査に狂奔するのである時に當り叔母谷村の住人橋將監と云へる南朝勤王の郷士ありて賊徒の己が村に逗留するを知つたれども此時將監は立を得ざる重病に打ち臥し居つて忠烈義憤に氣は速れど賊と戦ひ宮が悲憤を晴さん事の中々に思ひも依らず止なく事の顛末を手紙に認め急使を走らして川

上郷中二十三ヶ村に此變を傳へたのである、其文面には

(原文の儘)

先達自天王御兄弟とも三の公より龍泉寺に忍ばせ御坐在所、今度赤松が郎徒間島、中村といふ者北山へ忍び入り親王を害し奉り手勢漸く十餘人にて神器と御首を捧げて北朝に歸る我々南朝の御頼に依て守護し奉るに計らず此度赤松浪人の計略に因て御命を失ひ奉ること口惜き次第なり、其上御首を北朝へ渡すこと残念至極なり、此使着次第急ぎ村々の面々川下へ廻り塩谷村に出張して兩人共を討取り神靈御首を取還し御弟宮に奉るべし云々

此檄に接した二十三ヶ村民は且つ驚き且つ怒り我れ先にと武装し塩谷に集り渾ての指揮は當時郷士の中でも武名の聞高く土地での名士たりし伊藤、加藤の兩人に行ひ奇巖屹立せる溪谷の間に一同身を潜めて賊徒の來たるを待つのであつた、斯くとも知らぬ中村、間島は吹雪の止むを待つて手勢十數人に守護せられ宮の御首と神器とを奉持して悠々叔母ヶ峯を越して來たのである、此の有様を見た伊藤

加藤其他村民一同はそれッ、とばかり大舉して打つて出た、不意の伏兵に強悪なる中村、間島も驚いたが何分にも當時知られた強の者、従容自若として手勢と共に應戦して敵味方此處を前途と入り亂れて火花を散らして奮戦する様は目覺しく、壯烈凄愴云ふ斗りなし、かくての勝敗相方にも小暫が程は決せざりし折りしも味方に塩谷村の住人大西助五郎と云へる者あり兼て郷中での弓術の達人として聞へたるが此時川面に下り(吉野川をいふ)巖石の陰に身を潜めて持つたる強弓に一矢を加み強く打ち引きて

「己れ憎き賊徒、御宮が神靈と吾等が忠烈なる心の籠りある此の征矢を受けよ」と發矢と斗り狙ひを定めて放つ矢は空を鳴らして飛び行くよと見る間に今や味方を散々に惱ましつゝある中村が胸板深く射込んだ、流石の中村も「ウムツ……」との一聲を名残りに堂とばかりに其場に倒れて白雪は爲めに翻爛として血の紅に染めなされた

其五 南朝の正統全く亡ぶ

さしも賊徒の巨魁中村貞友も忠義の征矢に脆くも殪されたるを見て驚く間島はこは叶はじと狼狽して王が御首を其場に打ち委て神聖ばかりを懐きながら手勢と共に山中深く逃げ去つた、「己れ逃がしてなるものか、」と郷士の面々後を追ひたるが何分にも積雪丈餘の深山路とて意の如く働かんやうなく惜しくも打ち漏したるこそ是非もなし、

山中深く逃げたる賊徒は道を北山道にとりて牟婁郡大野村に出た時其郷の住人小河と名乗強者と逢ひて其小川一人にて散々に斬り惱まして丹生谷四郎右衛門、同五郎の兄弟兩人其他手勢の夥多殪されたるも悪運強かりき間島は神器を藏して逃れ去つたとは返すくも遺憾の極なり今も其時殪されたる敵の夥多の墓は大野村山中に存在せりと

さて中村を塩谷に斃した伊藤、加藤其他忠烈二十三ヶ村郷士の面々は奪返した王が御首を奉じて一先神之谷金剛寺本堂に參集して善後策に額を集めて評議を凝せし結果、或は再度賊徒の逆襲し來たりて御首を奪れんも圖り難ればとて、本堂の

天井裏に一先づ宮が御首を御隠し奉りてから再度其處置に議を凝した時此の主權を振れる伊藤、加藤其他重立ちたる郷士が説には、抑も當金剛寺は白鳳二年役の小角大峯山に參籠中、此地方に當りて毎夜赫灼たる光明の出て小角見えてこれ奇來たりける時圖らずも龍乘地藏尊の此處より出現しましたるを小角見てこれ奇瑞なりと光明放ち尊體の出現したる地を掘りたるに不思議や其中より岩と云ふ天然の文字ある石の現れたるに愈々奇瑞なりとて此寺を創設して自ら刀を執つて本像龍泉地藏尊を彫刻して安置し奉り大峯山奥の院と稱して役の行者の熱拜措かざる處なりし、後南朝後醍醐天皇吉野山に行在所を定め給ひける時、當時屢々行啓ましまし深く御依願遊され黄金の秘佛を納め給ひて金剛寺と御名稱を付けさせ給ひ、南朝が正帝より深く願拜を忝じけなくせしと同時に、三の公も此處神の谷が領地にて因縁深ければ宮が首級を該寺域内に葬り奉るべく最も其當を得た處置ならむ」と主張せし言に賛成した總ての郷士は然らばとて境内に王が御首を葬り奉り諡を奉りて高福院と稱され、祠を建て、御悲惨なる王が神靈を吊し

つゝあるなり。

自天親王、竹の園生の御身たるに憐れや逆賊足利が迫害に、畏れ多くも種々なる艱難辛苦を忍れて僅かに御一命を獵夫山樵の外訪ふ人もなき深山の奥の龍泉寺内にて味氣なき月日を御涙と共に過される時

遁れ來て身をおく山の柴の戸に
月と心をあわせてぞすむ

と御詠せられ書遺せられたるを今も龍泉寺の寶物として秘藏せられあると、さて、御薄命の限りならずや、又更屋某の歌とて

たつね入るこの奥山の柴庵

よも人しらす君いますとは、

かくて尊秀王の御弟宮、忠義王、尊雅王の御二方は、兄宮の悲惨なる御最後を遂られし後川上の高原村に隠れられて時の至るを御待ち給ひしが、御武運拙なく二宮ともに其後深山の奥の朽葉と共に薨れさせ給ひぬ其御廟は高原村福壽寺に在

りと聞く。

噫々これ南朝後醍醐天皇より九代に渡らせ給ふ正胤御三方なるに斯くての御最後に吉野の奥北山にて全く御悲惨極まる末路を以て御亡ひ給ふこそ、吾等臣民の返すくも遺憾として更により多く御靈魂を吊し奉りて我が、皇祖が皇統の御悲劇に感泣以て稍もすれば

現代 今上聖帝が御聖旨に背きて浮華荒怠に流れんとする國民が志氣の發奮に務めんこそ今日の臣民たる吾人の務めならずや……。

第六 四百三十餘年自天皇が墳墓落葉に埋る

自天王没後、程經時の朝廷は時御悲惨極まる南朝が末路を親たしく聽し召して毎年南朝の末路を擁護したる川上の郷士が二月五日と十二月二日に自天王が神靈を吊すべく大祭を執行する時に特に郷士の勤王たりし忠誠を表賞すべく畏れ多くも菊花の御紋章ある祭衣を着するを許されければ夫れより其祭の時には菊章の麻上下の禮服を着し、勤王たりし郷士の出仕と唱へて御祭式を舉行して王が御遺物御

大刀甲冑等を諸人に展覽せしむ、これ此の大祭を朝拜と唱へてる四百三十餘年に至る今日にも(只十二月の御祭のみは近世に至りて廢されたるが)いと盛大に其が子孫に依つて換りなく朝拜の大祭行れ居るなり。

王が御遺物は初め川上二十三ヶ村交替に保護し來りたりしが、寛永二年より後は御大刀御甲の胴を中奥、和田、神之谷、柏木、大迫、叔母谷、上谷、入之波の九箇村(六保と稱ふ)にて保護し、御冑は東川、西河、大龍、寺尾、高原、鹽谷、迫白矢、人知の九箇村(七保と云ふ)にて保護し、御甲の袖は井戸、武木、井光、下多古、白川渡の五箇村(四保と稱ふ)にて保護せられあるなり。

かくて南朝亡後は政權總て武家の手に握られて其全盛を極めたれば世人の志氣爲めに畏れ多くも皇室に遠ざかりければ随つて自天王が祠も年經るまゝにいたく朽ち果て、たゞさやかなる御墓のみ谷間がくれに苔むして幾年となく積る落葉に埋れ、都人の訪ふに由なき此深山路絶へて吊ひ參らす者もなく、獨郷民等ひとすじに祖先の遺訓を守りつゝ來る年毎の二月五日の朝拜の靈祭りするのみなりしが

王政復古明治聖代となりて、明治十五年秋畏くも朝旨に依りて石を建て尊秀王の墓と云ふ四大文字を鑄ませられてより川上郷二十三村の有志者語らひて自天王が御事蹟を石に鑄み御墓のほとりに碑を建て郷士等の子孫をして永く祖先の忠烈なる志を継ぎ以て皇祖皇宗が御遺徳を遙拜していよく皇室に勤むる心の厚からしめんとて畏れ多くも小松宮殿下の題額に依り明治十五年これを建設せり、

深山帯の處女

▲山中の處女は奈何して居る歟▲

大和國吉野郡は其全土總てが山又山で大峯、釋迦、彌仙、大臺等六千尺餘の廣大なる山岳の夥多を有する我國での名高い深山帯で現今にても恐るべも熊狼の出沒して人畜が屢々夫れ等猛獸の毒牙に害されるのだ。前記の探險記でくわしく記した、其深山路にも人は住んで居る、であらば勿論女も男も居らねばならぬ、其して家庭を作り村を成して居るは見ぬ誰れもの想像出來得る事であるが夫れ等山村に生れて育てられ居る處女は奈何ものであるか、これが消息を親しく知り度いと、は都育ちの令嬢其他婦人の腦に浮ぶ問題ではあるまいか、僕が畫筆を友に之れ等の山間に屢スケッチ探險を試みて其探險記行を此處に公にすると共に更に其地處女の風俗人情の探險記を加へて更に趣味を増さしめんとは著者の自信だ其見たまゝ感じたまゝをスケッチ畫稿と共に江湖に紹介するのだ。

▲▲▲▲▲
姫御前のあられも

先づ夫れ等深山帯の處女を書くに對して順序として吉野郡其入口より書いて行こう、吉野郡入口と云へば金剛山東麓吉野口驛から東南で山と云つてもほんの柴山其車峠と云ふを越したら吉野川は街道に沿ふて上流深山路を遶り流れて柴山溪を縫ふてゐる、其川面に沿ふた柴山に圍まれつゝある重なる町と云へば五條下市上市等でこれ等の町村に住んで居る人種は都市に近かくて行通の便利なだけ深山路よりも總てが進歩してあらねばならぬ、けれども其進歩が皮想で下劣で所謂半可通であるとは一般識者の觀察である、其上如何しき飲食店が多くて夫れ等に雇れ居る所謂る海に千年と云ふ如何しき醜業婦の跋扈なし居るを見れば夫れ等魔窟に沈溺し安い、其地中流以上の人種の如何が知られると同時に其家庭に育つ嬢さん達の程度を察する事が出来得るそれ等の子女の女學校時代は學校が此近邊に無いので櫻井か奈良へ出かけてはならない、爲に女學校時代は全々其家庭に遠ざかつて了ふのであるが、矢張り雀百迄とか云つて冬夏の歸省中に姫御前のあ

られもない、一錢二錢の銅貨の夥多を握つて賤劣極まるカツパと稱する賭博を下女や兄妹た友達等が寄つて其勝敗をする女學生のあつたのは事實に見た僕は一驚した、夫れが郡會とか縣會とかへ出て居られる名譽職のお嬢さんで、これを見つゝ咎めず反つて獎勵する氣味が父兄に有たのには返すくも夫れ等沒趣味なる家庭の有様に更に驚愕した、或年大演習を陪觀した時櫻井女學校を訪ふて山崎校長に御目にかゝつて僕は親しく其説を聞いた、奈何も田舎の女學校ですで家庭と學校の趣味が大變に懸隔して居りますです、その趣味の一致を待つて教育せんとするは中々に至難な事で都市よりも一層女子教育は六ヶ敷いと夫れとは云はずに其の邊を憂慮して居られたは實際に御心中御氣の毒に思はれた、夫れじやと云つても僕は皆が左様であるとは云はねど譬へ一人たりとも事實に於いてあつたのが此處に現れ以て全体の趣味の如何を或は斯くの如く誤解？没脚去られるのであろうか仕方はない、夫れに反して中流以下の處女は中々感心に能働く、或は僕は其裡面を深く觀察する機會が無かつたので皮想かも知れないが、朝は鶏鳴と同時に機

織音を賑しく立て、男子の野田出の留守を護りつゝ、殖産に務めて餘念がない、又女ながら甲斐々しく男子と共に山田に出で終日働く殊勝さは彼等教育の恩恵に浴するの出来無い憐れな處女達に見る事の多いのは何に依つてか、これ等を思へば現代の女子教育の價值がよく女性發達期の程度に合つた完全したものであると思れぬはらしい……。

▲▲▲吉野山の處女▲▲▲

さて次は上市の川向ひに聳る南朝の史跡深い吉野山の處女を書こう、此地春の花夏の大峯行者其他觀光の客の夥多を迎ふる土地にて全山住民の大半はそれに依つて生活して居ると云つてもよい、一体此土地に限らず他地方でも客の懷中を以て生活して居る土地の人情は、表裡の黑白が甚だしく輕薄で人が惡い、吉野山の住民も然りて山村だからと云つて信用は決して、出來ぬが其直接客に接するは男子に多くて女は比較的少ない結果は吉野山住の女は男よりは幾何か人が善い、けれども春の花其他觀光の客を迎へる此山の處女等は所謂る着飾つて來遊する客

の皮想を羨望して都を戀ひ虚榮に惱む度は烈しい夫れが爲め、中流以下の處女は宿屋の女中となり又都市に飛出して玉の輿たらしむとして返つて其一生を暗憺たる魔界に投ずる者が多い、然れども全山總てが其惡風潮に感染して居るか云へば爾でもない、牛の脊のやうな山の繁華な町を山谷隔た村落や通り筋でも上奥の小守邊りの處女は中々に男子も及ばぬ働きぶり、家庭に在つては上下の別なく子女は春夏の養蠶に餘念ない、十二三才のまだ痛いけな小女が夏の日中炎天に打たれつ、峻しい山坂越へて桑の葉を集めて脊に數貫を負ふて働くを其期節に行つた人の見受る事であろう、又十才足らぬの下流の子女は友と連立ち柴集めに山に出る、又養蠶の無い期節には姉さん被り優しく、脚絆甲掛甲斐々しく朝は星を戴いて金峰山に登り夫れより谷を下り屹岳を攀て數里の深山に入りて切り出された樽木の夥多を脊負ふて吉野に運搬して其賃を以て家庭を助けつゝある、それが雨の日雪の日も怠まず朝の茶粥に氣を張りて終日握飯の辨當のみで此働をするには感服の外はない。

たる溪間の僻地四方は屹岳に圍れたる洞川と云ふ村落がある、山目は秀で、村を達る洞川の溪流清く老鬱たる杉檜は道間小暗き迄に繁茂して仙氣の神々たるげに深山の一村落である、戸數凡四五十戸にて此村の祖先は役行者の從臣たる前鬼後鬼の末孫であるので他村と結婚其他親族關係せば穢るとか云つて今に置き他村と結婚はせない、一村悉く血族結婚で皆親類だ、此一村の大半は旅館で夏季の大峯參詣者に依つて總てが生活して居るとも云つてもよい、男子は其十二三才より大峯登山期には山上に登りて山案内其他宿引したりして冬籠りの財を積むに餘念がない、無論古來より女人嚴禁制其他不淨を厭ふ大峯行者を迎ふるのであるから女は夫れ等に關しては直接關係はない變りに其他の用事をば男子に變つて働かねばならぬ、所謂る味噌醬油酒其他の常食物は五里の五條迄取りに行かねばならぬ、夫れの運搬は村内の女がやつて居る、夫れ等の女子は山氣の爲めか總てが色飽く迄白くて眼元の涼しい美婦人揃いで大和での京、名古屋と云はれて大和路での美人村である、夫れ等妙齡の美人は少なきは七八人多きは數十人隊を成して頭

に手拭手には甲掛け腰には用心袴と云つて山間露をさけるべく袴を付けて此地にて切り出される樽木を脊負ふて五條に出で歸路に常食物と換へて里歌の節面白く調子揃へて唄ひつゝ杉檜の樹間を縫ふて往復運搬する様の奇觀は雄々しくて又可憐限りない、これ洞川の美人隊として一つの名物となつてある、

▲村財四千万圓を有する富豪村の處女

大峯山頂より山嶺傳ふて小笹に出で夫れより人跡全く絶ゆる叔母ヶ視の一大嶮巖を踏んで五里下に降れば吉野川の上流熊野街道に出る其地を川上村と稱して東は三重縣多氣郡に界し西は南吉野及び中莊の二村に接し南は天川北山の兩村と相犬牙し、北は四郷小川國巢の三村に隣して東西十三里南北六里卅二町の大面積を有して村内を東川、西川、大瀧、寺尾、北鹽谷、迫、高原、白屋、人知、井戸、下太古、上太古、上谷、伯母谷、大迫、柏木、入の波、神の谷、北和田、白河渡、中興、淀武木等の二十三大字に分ちて戸數一千數百人口六千餘人を有し北は五車の峠、南は叔母峯の嶮、西は大峯の連山、東は大臺の大嶮に圍まれたる深溪谷の

村落で大字の人家は五十戸餘にて各々里餘を隔り、其間平地稀にして一上一下山を出で山に入り屹巖起伏して山氣深仙と身に迫りて眞に別天地を畫してゐる、地底に大瀑布がある凄絶奇觀極まる三大洞窟は其柏木邊りに散在してある、斯る土地、従つて田圃尠ない、けれども鬱蒼たる森林は巖然として天を機し白晝猶暗く瀟望千里の美觀を呈する吉野杉檜の濫觴の地で遠く六百年來の遺業として住民の多くは林業に頼て生計をして居る夫れに對して天與とも云ふべき吉野川は其源を大臺ヶ原山に發し村内を貫流して紀州和歌山港に注ぐ其延長三十余里ありて木材の運搬はこれに依つて輸出せられる林業至便の土地にて夫れが爲め有する村財は四千万圓の巨額にて年々伐材して川を下すに對して徵收する特別税が一ヶ年七萬圓に上ると云ふ所謂一村落として全國他に類の無い一大富豪村で我國林業大家の土倉庄三郎氏の邸は村内大瀧にある、又此地史跡に富みたと同時に大和に於いて最も早やく皇化の惠澤に霑いたる土地にて 神武天皇熊野路より北山を経て川上に入らせ給ひ蹕を此地に駐め給ふ時に其地の井光と云ふ者天皇に奉仕して皇

軍の嚮導を奉り其他に功多かりしを以て軍平定の後吉野の首部となり子孫世々吉野を總管した、これ今の川上人士の始祖であると云ふ、其後 應神天皇、雄略天皇達御潜幸あらせられ、殊に南朝時代には 後醍醐天皇屢々御行幸あらせられ、其他畏れ多くも南朝の御皇孫方が足利の迫害に此の地に隠れ給ひ終に御悲惨極まる御最後を以て此處に全く御亡ばせ給ひしと云ふ此の村内に養はれる處女は都市に出づるにも五車の時を越さねば人車の便が無いので草履に跡掛して溪間の岩道杉の葉露に打れつゝ往復せなければならぬ。

▲深山溪谷の娘子軍

夫れ等子女を教育すべきの學校は元より女學校なんかはない、東西拾三里南北六里餘の山中に高等小學が三と尋常十四校のみで夫れ等に通學する少女は冬の日雪氷に閉れたる岩道を厭はず數里の遠路に通ふ様は實に感服の外はない、夫れ等の様を便利な都市に在つて町餘の學校へ通學するに猶俾に擁せられて往復する令嬢を見受るがそれ等の嬢さん達に川上山村に育つ勇敢な少女を見せてやりたい、又

斯くして小學を卒へた者は中流以上の娘は家庭に放れて櫻井奈良其他の女學校に這入る其他の子女は伐材時期には山中深く這入りて川面迄出す樽木の運搬に従事する、其様は洞川の處女に劣らぬの奇觀で其人數は洞川よりも多く僕が見たのは其一隊數百人の大多數にて岩を噛む吉野川の急流に懸れた丸木橋を樽木を負ふ婦女子が渡りて長く山頂より溪間列を成して里唄面白く歌ひつゝ連る隊は町餘に及びあるはこれ深山帯の娘子軍として特筆なさねばならぬ事である、夫れ等の婦女子の中、婦女子のみではない男子ですら未だに瀟車や漁船を見た事の無い者があつて夫に對して魚族の種類の多く知ぬ者があるから井戸と云へる村の某家は海魚の其種類を乾物として庭先にぶら下てあつた、これは海魚の種類を知らぬ者に見せるが爲めの標本である、又此地の祖先が南朝後龜山天皇の曾孫に當らせ給ふ自天王が三種の神璽を擁して此地に入せられ南朝復興を計られる時これを迎へて王を擁護した其時の郷士たる家は筋目と稱へ其筋目でない家をば殆んど特種部落のやうに扱ひいて、夫れが此村では結婚問題にも關して財産よりも其筋目を八

釜く云ふのである、従つて其筋目でない家の娘は才色財寶共に豊なりと云へどもこれを筋目家より嫁として迎へるを好まぬと同時に娘の方も其筋目でない家ならば心好く決して結婚はせぬ、かゝる堅い主義を有して居るから一般の風俗は嚴格である。

▲山深中の女子大學生

僕が此村に這入つた時其柏木村川向い神の谷なる兼て知れる林業家山本某を訪ふた、丁度頃は八月で今し夏季休で息女の歸省中であつた、其息女の男は中學女は女子大學、高等女學等の生徒で僕が行つた時にこれ等三人が裏の畑で菜を摘んで居られた、其四方は大嶮岨屹立する山岳は波濤の如く重なり山氣冷かにして下方に激流する吉野川の水勢は轟々と音してゐる其雄大深壯の大景の中に白キヤラコ胸當優しく山風に靡かせて調清らかな唱歌うたひつゝ姉弟妹樂しく夕食の菜を摘む様は此山間に不調和の觀あるが夫れだけ此地に這入れる僕に對して珍らしく思はれた深山中の女子大學生として一種の好奇心に驅れた僕は夫れをなしに思想や

「何分にも這廬山の中、夏期には色んな方が登山して来られますが、冬期六ヶ月間は雪に閉ざされて行通の便は全く絶て只恐ろしい烈風雪倒の音を聞く斗りで馴たと云ひましても其烈しい風の時には此の家棟が倒れるやうな音して動揺します恐怖さは其れは何んとも申されませんが、男子の方でも此處に住馴ない方は強烈い音響に怖れてやう眠らぬ方が多いです、其上今は最う来なくなりましたが三四年前迄は雪に栖家を埋められた狼が参りまして此の椽下で子を生んだりいたしましたのです……」と優しい唇より此の凄談を聞く彼女は髪を廂に結んで焦紫のリップンを後の根に止めてある、顔立はクツキリとした圓顔で色の白い透明やうな美人だ、其れが耻かしさうに眼元に紅葉を散して俯向勝ちに猶も語を次ぎ、「其れが爲めで寒氣で總ての流動物は凍へて迂潤り火箸や其他の金物に手を觸る事が出来ません凍わ付いて丁いますもの其が爲め焚火は日夜の別なく絶へずして家内は皆圍爐の傍で冬籠るのです、そう云ふ有様でありますのでお友達なんか拵へやうと思つても家内の外には人と云つては見る事が出来ません、學校ですか川上村

和田の高等小學を卒業たのみです、妾しの樂しみですか、其れは本當に何もありません、只都市で發刊される新聞雜誌殊に女學世界なんかのやうなものを愛讀する位いなもので外に何にもないです云々」と説く彼女は斯くして一點の塵だに無き山巔で清く崇く雲に親しむ天女的生活をして居るのだ、其態度は淑女だか心は小供だ、天真爛漫でそして饒しい、夜は母や兄弟と團樂して老いた父母の肩を擦りなんかして一言半句親や兄に反いた事はない、又彼女が女の痛いけな身を以て此の荒山道を一人で往復するとは境遇に依つてゝあるが深窓に育つ處女達が此勇敢なる大臺原山頂の處女に對して多少反省する處あらむ歎!

▲古武士的嚴格な村女と亂暴極まる村女

柏木より叔母峯越した北山山中の北山村の處女は川上村處女と餘り大差がない、其他に書き度い村としては十津川村であるが僕はまた其地に足を入れないで詳細しく知らぬが、此の十津川村は昔より武士道の盛んな土地で近世にも名將軍の多を出した村で風規は嚴格で女ながらも武藝の嗜ある者が多いそな、又其附近の

村落には祖先が平氏の公家達の子孫であること云つて洞川のやうに他村と結婚せな
い村もある、又其邊の山中には婦女子が定まりたる夫を持たずに夜中門を開放し
て男子の襲來を待て其唯れ彼なしに身を任すと云ふ亂暴極まる一部落が今に存任
してあるこの話、これは事實とは思はれぬが深山帶の處女に關係せる話としてい
づれ期を得此地に遊んで親しく觀察を遂げてからまた紹介する時もある、何分
の不文思ひ半を記す事は出來無いが其處はスケッチ畫稿に云はしたつ、讀者
幸ひに諒せよ

大冒險的 深山帶大探險終

明治四十三年六月十五日印刷
明治四十三年七月十五日發行

定價三十五錢

著者 高橋舟齋

大阪市南區長堀橋筋二丁目三十七番地

發行所 藤堂卓

大阪市南區長堀橋筋二丁目角

發行所 書肆公立社

振替口座七〇〇〇番



著作權所有

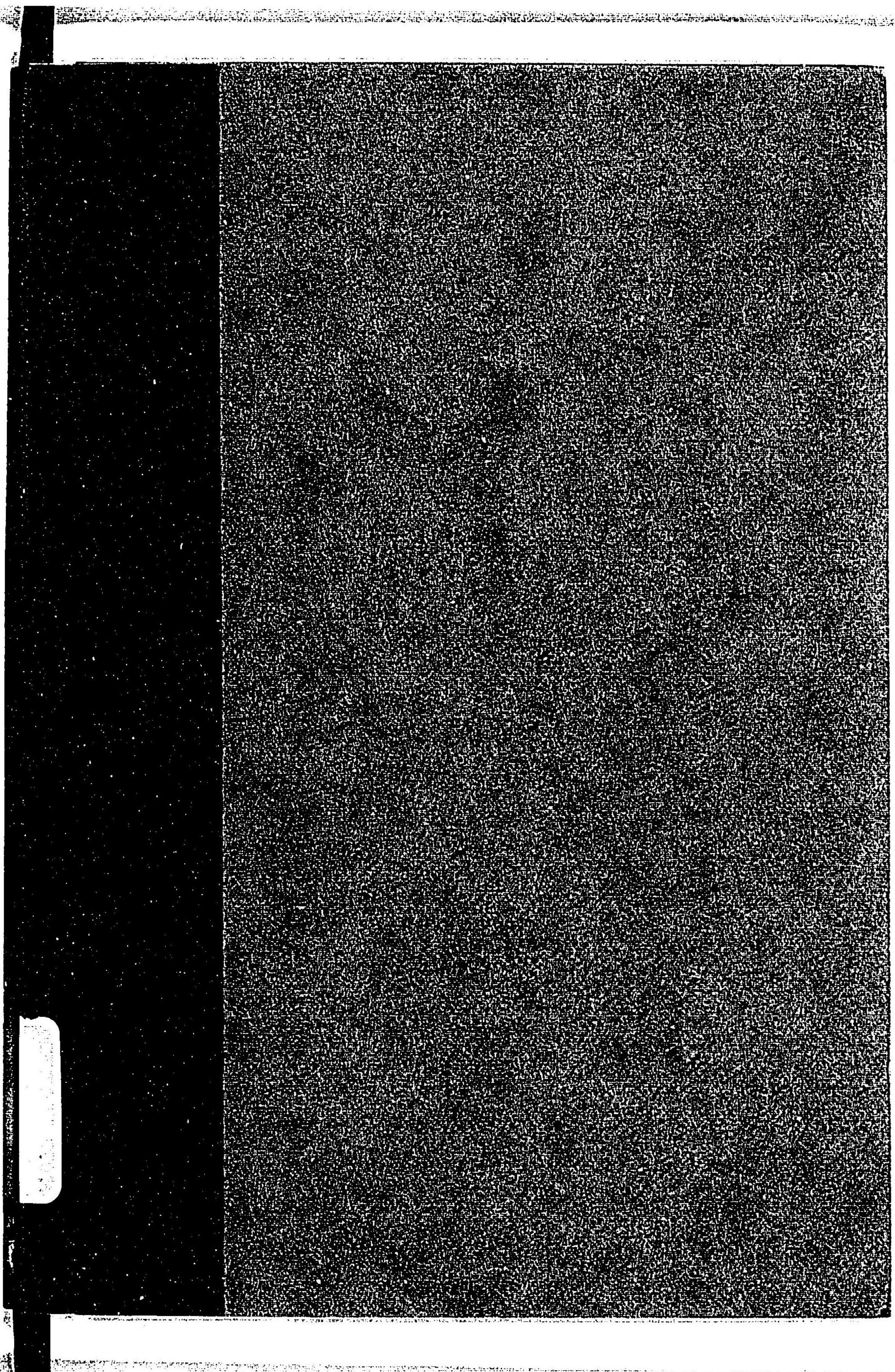
工5R87

— 新 著 一 覽 —

生編	李花	君著	舟齋	高橋	君著	三郎	小崎	郎著	桔梗	船越	郎著	桔梗	船越	發行	七月	三十四
遺書大觀	深山帶大探檢	結婚哲學	京おとまな	あづま男	浪華女	浪華男	其日其日の歴史	新式日本小年表	全二枚	正價拾錢	郵稅貳錢	山本	鯉城	君著	五錢	正價貳拾
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
正價四拾	正價參拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾	正價貳拾
郵稅四錢	郵稅六錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢
吐川	森田	輯部	館編	觀象	郎著	大七	遠藤	郎著	貨一	小須	君著	楓水	堀井	君著	鯉城	山本
新式日本書翰文	男女一代の運命	齒の衛生	養鷄養鴨秘訣大全	三極栽培新書	日本の美文	新式日本書翰文	男女一代の運命	齒の衛生	養鷄養鴨秘訣大全	三極栽培新書	日本の美文	新式日本書翰文	男女一代の運命	齒の衛生	養鷄養鴨秘訣大全	三極栽培新書
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾	正價參拾
郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢

發行所 大阪市長橋筋二丁目 肆書 公立公社





特51

879

023133-000-2

特51-879

冒險的大壯拳深山帶大探險

高橋 舟齋/著

M43

ADB-1163

